

〔学会展望〕

芥川龍之介が不用意に扱った素材

——長尾佳代子が行ったケイラス研究の成果——

小林 信彦*

舞鶴の工業高等専門学校で国語を担当していた時に、長尾佳代子は芥川龍之介の『蜘蛛の糸』を教材の一つとして選んだことがある。カンダタという男が地獄を脱出できなかった話である。熱心な学生から授業中に質問を受け、カンダタの伝わっていたクモの糸が急に切れた理由について聞かれたが、長尾は納得のいく説明をすることができなかった。

仕方なく問題を一時保留ということにして、作品を検討し直した上で分かったことを次の授業で説明すると約束した。しかしながら、『蜘蛛の糸』を繰り返して読んでも「正解」は得られず、残念ながら学生との約束は直ぐに果たせなかった。長尾はここで諦めず、『蜘蛛の糸』を扱った論文を可能な限り集めて、数カ月もかけて入念に検討してみたが、やはり望んでいたものは得られなかった。

ここで長尾が目にしたのは、ケイラス (Paul Carus)¹⁾ の Spider-web (クモの巣) である。この作品を詳しく検討することによって、その翻案である『蜘蛛の糸』の物語構成に関して有益な情報を得られるかも知れないと期待したのである。長尾が熱心に調べたお陰で、ケイラスに豊かに備

* 前本学文学部

キーワード：芥川龍之介、『蜘蛛の糸』, Paul Carus, *Karma*, ヨーロッパの仏教研究

わる仏教の基礎知識が確認され、それに欠ける芥川にとってケイラスの主旨は理解を越えるものであることが突き止められた。これは非常に大きい貢献であり、貴重な成果である。

長尾の努力のお陰で、芥川作品の出来上がる事情を跡付ける道筋が付き、物語展開の各所に見られる不可解な点を明らかにする可能性が開けてきた。そこで、Spider-web について研究した成果を長尾は2003年に学会誌に寄稿して採用された。²⁾そして、さらに研究を進めて、2005年に別の学会で口頭発表を行った。³⁾こうして、学生たちの期待が満たされることはついになかったものの、『蜘蛛の糸』の解明の役立つ貴重な知見が得られることになった。

長尾は2004年に大阪体育大学に移り、一般教育で日本文学を担当することになった。その後も『蜘蛛の糸』を教材として使う機会があり、今まで通りに素材の研究を続け、もっとよくケイラスを理解しようとして、その著作を数多く読むと共に、周囲の状況についてもいろんな方面から調査を試みた。そして、その間に多くの事実を明らかにすることができた。

このようにして研究が進むうちに、ケイラスについて知識が次第に広がっていき、1893年にシカゴで世界宗教会議 (The World's Parliament of Religions)⁴⁾が開かれたのを契機に、日本との関係ができたことを知った。世界宗教会議に参加した日本人と親しくなったのに加え、ケイラスの著書が日本で印刷されることにもなって、いろんな人々との結び付きができたのである。この点を中心に長尾は改めて研究の成果を学会で発表した。⁵⁾このことはケイラスを理解する上で重要であるのは言うまでもないが、現代日本文化を考える上からも興味深い課題であり、芥川が生きた世界の理解を深めることにもつながる。

そして、ケイラス関係の膨大な資料がカーボンデイルの南イリノイ大学にまとまって集積されていることが分かった。⁶⁾そこで、長尾は2006年の

芥川龍之介が不用意に扱った素材

夏にカーボンデイルへ行って、南イリノイ大学でケイラス関係資料の調査に取り掛かった。⁷⁾ その際にケイラスがドレスデンにいた頃の著作を見つけて複写してもらったが、⁸⁾ これも長尾の研究にとって貴重な資料である。その後は集めた資料に取り組んで、長尾は熱心に研究を進めている。まだ始めたばかりではあるが、これまでに報告されただけでも、興味深い成果が上がっている。⁹⁾

はしがき

『蜘蛛の糸』を書いた際に芥川が素材として使ったのは、ケイラスの Spider-web である。長尾が詳しく検討した結果、この作品は根幹部分で仏教文献をよく踏まえていることが明らかになった。そして、さらに長尾の研究によって、仏教の伝承を受けたケイラスの主旨は、芥川に全く伝わっていないことが明らかになった。わけの分からないまま、『蜘蛛の糸』の作者は翻案の作業を行ったのである。重要な点で素材の内容を取り違えたせいで、この作品で芥川が展開した物語は、はなはだ辻褃の合わない点が多いものとなった。

翻案作品を扱う際には、素材として使われた作品を理解することが極めて重要な作業である。元の作品と切り離して見た場合には、不可解な点があることを強く感じて、その実態はなかなか見えにくい。そのような際には、素材そのものを入念に検討することによって、不可解な点が明らかになることができる。芥川の『蜘蛛の糸』の場合、このことは特によく当てはまる。

例えば、冒頭であれほど救出に熱心であったオシャカサマ（御釋迦様）は、カンダタが再び地獄に落ちるのを「ちつと見ていらつしや〔る〕」だけで、別人のようにひどく冷淡である。そして、殺人と放火の一生を送った男は、一度だけクモを殺さなかったことを根拠に地獄から解放されること

になるが、別の場面では同じ男が他の者に無慈悲であることを根拠に再び地獄へ落とされる。このように不可解な点が生じた理由は、素材を検討することによって初めて明らかになる。

翻案しようとする作家が素材を理解できずに、しかも理解できないという自覚がないまま、自分の思い込みだけで物語を作った場合、話の展開に不可解な点が現れるのは避けられない。このことを明らかにするには、作家が読み違った点を突き止めなければならないが、そのためには素材そのものを厳密に読み解くことが先ずしなければならない作業である。

『蜘蛛の糸』が翻案作業の成果であることはよく知られているにもかかわらず、素材への関心は今まではなほだ希薄であって、この視点から作品研究を深めようとする試みはなかった。長尾の言うように、「出典を突き止めたにもかかわらず、そこに書かれている内容と芥川の著作との比較は表層的なものにとどまっている」のである。¹⁰⁾ 素材となった作品への好奇心がなく、その内容を知ろうという気がない。この点で長尾が行ったのは画期的な試みであり、芥川研究に新しい可能性を開くものと言えよう。

A1 ケイラスの説話は仏教説話の形式に従っている

さて、長尾が研究対象として取り上げたケイラスは、数多くの作品を遺しているが、その中でも特によく知られているのが *Karma* ([報いを伴う] 行い)¹¹⁾ である。五つの話から成る小さな説話集であるが、その四番目の話が *Spider-web* である。この作品は多くの言語に翻訳されて広く世界中で読まれた。確認されているだけでも、少なくとも13もの言語に翻訳されている。翻訳者の中で特によく知られているのは、トルストイ (Lev N. Tolstoj)¹²⁾ とビューヒナー (Ludwig Büchner)¹³⁾ である。そして、これに限らずケイラスの著書は今でもよく読まれている。¹⁴⁾

この説話集は1894年に雑誌 *The Open Court* (公開法廷)¹⁵⁾ に掲載され、

芥川龍之介が不用意に扱った素材

その翌年の1895年に単行本として発行された。¹⁶⁾ この単行本 *Karma* は日本で印刷された。特殊な和紙を使った本で、日本の画家が描いた挿絵が付いている。¹⁷⁾ 東京の長谷川商店がケイラスに頼まれて印刷と製本を引き受けたのである。出来上がり品は非常に評判がよく、翌年の1896年に再版が出て、さらに翌年の1897年に第3版が出ている。初版のテキストは雑誌に掲載されたのと同じであるが、再版では新たに10行ほどの文が Spider-web の中ほどに追加された。芥川が『蜘蛛の糸』を書いた際に使ったのは、再版の日本語訳である。そういうわけで、長尾がケイラスの研究に使うのも、長谷川本の再版である。ここでもケイラスの *Karma* に言及する際には同じように再版を使う。

絶望した大強盗マハードータ (mahādūta) を励まそうとして、苦行者のパンタカ (panthaka) は語り掛ける。ブッダの教えを身につければ救われる可能性があると言い、その例として地獄から救出されかけたカンダタ (kandata) の話をしてやる。¹⁸⁾ 救出されかけた大悪党が途中で地獄へ逆戻りする話である。まず、この Spider-web の内容を要約すると次の通りである。

大盗賊のマハードータは重傷を受けて死にかけていましたが、苦行者のパンタカが手当をしてやっていました。その時に大盗賊が言いました。「私は悪いことばかりして一生を送ってきた。その報いとして地獄へ行くしかない。」これを聞いた苦行者は言いました。「絶望することはない。アートマンが実在しないことを知れば、お前に希望が開けよう。その例として、お前と同じように大盗賊であったカンダタの話をしてやろう。」

大盗賊のカンダタは死んで地獄に行って、十億年以上にもわたって恐ろしい苦しみを受け続けていた。するとブッダが地上に現れた。その瞬間に[ブッダの口から]光が放たれて、それが

地獄にも届いた。そして、地獄で苦しむ連中は元気づいた。カンダタはブッダに慈悲を請うた。

ブッダは使いとしてクモを下へ降ろした。クモが地獄に達すると、カンダタはその細い糸をつかみ、それに取り付いて上へ上へと登って行った。突然カンダタはクモの糸が震えるのに気づいた。地獄にいる仲間が大勢いっしょに登ろうとしていたのである。カンダタは叫んだ。「このクモの巣は俺のだ。お前たちは放れろ。」

すると直ちにクモの巣は破れ、カンダタは真っ逆さまに地獄へ落ちて行った。[「俺のだ」という言葉を口にしたカンダタは、]アトマンの存在をまだ信じていたのである。[間違った考えを捨てなかったせいで、この男は救われる機会を失った。]

苦行者のパンタカがこの話を語り終えた時に、瀕死の重傷を負った大盗賊のマハードゥータは、「私にクモの糸をつかませて下さい」と言いました。[カンダタの失敗を繰り返すまいと決心し、正しい教えを守り抜こうという気になったのです。こうして、地獄に落ちて恐ろしい苦痛を味わい続けることになるにしても、マハードゥータは未来に希望を託すことができるのです。]¹⁹⁾

ケイラスの説話の構造に着目して、長尾は「[伝統的な]仏教説話の形式に従っている」と言い、²⁰⁾「枠物語」(flame story)²¹⁾と呼ばれる形式を踏んでいることを指摘する。²²⁾大きな枠の中にはめ込まれたような形で、別の話が導入されるのである。大きな話の流れの中で新たに事態が展開すると、登場人物の一人があることを思い出して、他の登場人物に聞かせるために語り始める。ケイラスの Spider-web では、修行者のパンタが介抱していると、大盗賊のマハードゥータは地獄行きを覚悟して、自分の将来に深い絶望の声を上げる。そこで苦行者のパンダカはカンダタのことを思い

芥川龍之介が不用意に扱った素材

出して、事の次第を語り始める

Spider-web の直前の話 Among the Robbers (盗賊たちの間で) では、²³⁾ マハードゥータの率いる盗賊団にパンタカが襲われるが、辛うじて命だけは取り留める。次の日にマハードゥータは手下どもに刃向かわれて瀕死の重傷を負うが、駆けつけたパンタカに介抱される。このように、ケイラスの説話集 *Karma* では、それぞれの話は末尾が次の話と繋がるように工夫されているのである。

Spider-web の構成を詳細に検討した結果、これが仏教説話の形式に添っていることに長尾は気づき、この小作品が構成面で仏教説話の伝承を受け継いでいることを明らかにした。芥川の使った話が仏教説話の形式を踏んでいるとすれば、素材研究の立場からその意義は極めて大きい。ケイラスの研究で長尾が上げた最初の成果である。

A2a ブッダが放つ光が地獄にも届く

地獄にいるカンダカが救出されるきっかけとなる一連の出来事について、ケイラスの Spider-web には簡潔で要を得た記述が見える。「ブッダが地上に現れて光を放つ」に始まる一連の成り行きが語られる箇所である。ケイラスの物語の中で、この箇所に長尾は先ず注目する。

さて長尾によると、「ブッダが無条件の救済者ではない」ということは仏教の常識である。²⁴⁾ 長尾の言う通りである。仏教で構想されているブッダの機能は「正しい教え」を伝えることに尽き、後はそれぞれの人の問題である。²⁵⁾ 「正しい教え」に従って努力するかしないかは本人次第であって、ブッダの関知することではない。それに、人々が「正しい教え」に従って努力するのは、ただただブッダを目指すためであって、トラブルを避けるためではない。

ブッダが説く「正しい教え」に従って、人々は努力を重ねて最終目標を

目指す。遙か遠い未来に²⁶⁾「究極の解放」(解脱)を得てブツダになることである。人々は限りなく生まれ変わって、この最終目標を目指して準備に励む。ブツダが人々を促して頑張らせるのは、今の生涯で意義深い生活や幸せな生活を送らせるためではなく、遙か遠い未来にブツダにならせるためである。

「行い」(業)は必ず「報い」(果)を伴うということは、個人の事情や都合を超えた普遍の法則であり、ブツダはこの「法則」に干渉することがない。すべてはこの法則に沿って機械的に進行する。「悪い行い」(悪業)をした場合、「法則」によって自動的に決まる「辛い報い」(苦果)は、すべてを味わい尽くすまで逃れようがない。このような世界の状況にあって、ブツダは「正しい教え」を説く。

ブツダが無条件の救済者ではなく、さらに長尾が言うように、「ケイラスはこの点をキリストとブツダの決定的な相違点として認識しており、」²⁷⁾ Spider-web を含む仏教説話集 *Karma* の中でも、ブツダが教える「正しい教え」の重要性について繰り返し述べられている。この小さな話でケイラスが力が入れて語っているのは、「正しい教え」についてである。

さて、絶望に打ちひしがれた臨終のマハードウータを元気づけようとして、パンタカはカンダタの話を語り始める。この話で最初に述べられるのは、地上にブツダが現れて光を放つ次第である。[微笑んだ]ブツダ[の口]から放たれる光とは、ブツダの口から発せられる「正しい教え」の象徴である。このように、カンダタの話にまず出てくるのは、「正しい教え」が伝えられる様子である。

As an illustration, I will tell you the story of the great robber Kandata, who died without repentance and was reborn as a demon in hell, where he suffered for his evil deeds the most terrible agonies and pains. He had been in hell several kalpas and was unable

to rise out of his wretched condition, when Buddha appeared upon earth and attained to the blessed state of enlightenment. At that memorable moment a ray fell down into hell quickening all the demons with life and hope, and the robber Kandata cried aloud: “Oh blessed Buddha, have mercy upon me! I suffer greatly, and although I have done evil, I am anxious to walk in the noble path of righteousness. But I cannot extricate myself from the net of sorrow. Help me, O Lord, have mercy upon me!”²⁸⁾

「悪い行い」をすると、「辛い報い」が自動的にもたらされ、これからは誰も逃れようがない。「悪い行い」に相当する「辛い報い」を味わい尽くすまで、じっと耐え忍び続けるほかないのである。並外れた「悪い行い」の結果として地獄の苦しみがもたらされると、やらかしたことに相当するだけ、永遠とも思える長い時間をかけて、²⁹⁾ 極度の激痛に耐えて地獄に留まらなければならない。それまでは手の打ちようがなく、途中で打ち切って抜け出すことができないのである。このような絶望的な状態あって、劇的な機会が訪れることがある。この世にブッダが現れる時である。このことについて、長尾は次のように言う。

そんな彼らにとって奇跡とも言えるチャンスが巡って来るのが、地上にブッダが出現した時である。この時、ブッダの身体の光が人間世界はもちろん天上から地獄までも照らす。この知恵の光に浴した衆生はこの世に輪廻を超越したブッダがいる事実を知り、「輪廻の世界を抜け出して悟りを開きたい」とか「もう二度と地獄や餓鬼や畜生（動物）といった悪い境遇に再生したくない」「人間に生まれ変わってブッダの弟子になりたい」などの気持ちを抱くのである。³⁰⁾

このように仏教に伝承されているアイデアを分かりやすく示す例として、

長尾は繰り返して仏教説話に見られる定形文を挙げている。³¹⁾ こうして、上に引いた Spider-web の文のうち下線を付した部分は、仏教文献から継承されたことが明らかになり、ヨーロッパ人が気まぐれに思いついたのではないことが確かめられた。こうして、核心を成す部分の確かな典拠が突き止められ、*Karma* 研究の貴重な第一歩が踏み出された。長尾の大きな成果である。

A2b *avadānaśataka* に「ブッダが光を放つ話」が伝えられる

代表的な仏教説話集 *avadānaśataka* (100編のアヴァダーナ説話)³²⁾ には、「ブッダが光を放つ話」が伝えられていて、何度も繰り返して語られる。この説話集の翻訳は1891年にフェール (Léon Feer) が出している。³³⁾ Spider-web を含む説話集 *Karma* をケイラスが出した1894年のヨーロッパでは、その気になれば誰でも *avadānaśataka* を読むことができたのである。

C'est une loi que, à l'instant où les bienheureux Buddhas font voir le sourire, des rayons bleus, jaunes, rouges, orangés, jaillissent de la bouche de Bhagavat. Les uns vont en bas, les autres en haut. Les rayons qui vont en bas pénètrent dans les Narakas Sanjīva, Kālasūtra, Sanghāta, Raurava, Mahāraurava, Tapana, Pratāpana, Avīci, Arbuda, Nirarbuda, Saṭaṭa, Hahava, Huhuva, Utpala, Padma, Mahāpadma. Alors dans les Narakas qui sont chauds. ils arrivent froids; dans les Narakas qui sont froids, ils arrivent chauds. De cette manière, les êtres qui y sont (renfermés) éprouvent un changement dans leurs souffrances, et il leur vient une pensée qui'ils se communiquent en ces termes: Messieurs, serions-nous déçus d'ici, ou serions-nous nés ailleurs? Mais pour produire en eux la foi, Bhagavat fait un signe. Ils voient

ce signe et reprennent: Non, Messieurs, nous ne sommes pas déçus d'ici, nous ne sommes pas nés ailleurs. Seulement il y a un être tel, qu'on n'en avait pas encore vu; c'est par sa puissance que cette souffrance qui caractérisait notre (condition) est interrompue. Ceux-là donc, après avoir incliné leur esprit à croire à l'occasion de ce signe, et après avoir épuisé jusqu'au bout les souffrances qui mettent fin à leur Karma, reprennent attache parmi les dieux ou les hommes (pour y renaître) et devenir des vases de vérité. (光が下に向かう場合の顛末) …… (光が上に向かう場合の顛末)³⁴⁾

「ブツダから放たれる光の話」では、微笑んだブツダが口から発した光は地獄にも達する。この特異事象が象徴するのは、ブツダの説く真理が地獄にも及ぶということである。そして、ブツダは自分の使いを地獄へ派遣する。ブツダは「超自然力によって作り出す作業」(神變)を行って動物を作り出し、これを送り出して人々に「ひたむきな信仰」を起こさせる。³⁵⁾ この使いの姿を眺めると、地獄にいる連中の心が澄みきって、「ひたむきな信仰」が起こるのである。

ブツダが派遣した使いを見て、地獄で苦しんでいる連中は心が清らかになる。そして、地獄での苦しみが終わった後で、神々の世界や人間の世界に生まれ変わり、「四つの真理」を身に付けることができるようになる (après avoir épuisé jusqu'au bout les souffrances qui mettent fin à leur Karma, reprennent attache parmi les dieux ou les hommes [pour y renaître] et devenir des vases de vérité)。³⁶⁾

ブツダの基本的な世界観が四つの項目にまとめられて、「四つの真理」(四諦)と言われる(「生きることは苦しみである」, 「苦しみの原因は欲望である」, 「目指すべき理想は欲望を消すことである」, 「欲望を消す方法が八つある」)。この「四つの真理」を身につけると、正しいものの見方が

確立して迷うことがもうない。これで遙か遠い未来にブツダになる見通しがついたわけである。こうして、「究極の解放」に向かって大きく一歩踏み出すことになる。

長尾の粘り強い研究のお陰で、Spider-web の核心部分が確かな典拠を踏まえていることが立証され、ケイラスが仏教の伝承を受け継いでいることが確かめられた。19世紀末のヨーロッパは、そのような話が語られるのにふさわしい所であった。³⁷⁾ ケイラスが語るカンダタの話は、仏教に馴染みのない者が自由に考え出した話ではない。そして、この話の中で言われていることは、仏教の伝承に忠実に「正しい教え」を信じることの大切さである。

A3a 地獄脱出が図られても、再び「正しい教え」に話題が戻る

ケイラスの Spider-web で、ブツダが使者として送り出したクモは、地獄の底へ着いてカンダタを見ると、“Take hold of the web and climb up” と言う。³⁸⁾ 「ひたむきの心」をカンダタの心に生じさせて、ここでは提供されたクモの巣に縋って、ブツダに頼り切ること。これがブツダの意を受けたクモの伝えようとしたことであつたはずである。早速カンダタは言われるままにクモの巣に乗り、恐ろしい地獄から抜け出そうとして上へ上へと登り始める。

しかしながら、救済の可能性が開けるといっても、実際に救済されてブツダになるのは遙か後のことであり、果てしなく生まれ変わりを繰り返した後のことである。したがって、救済作業が直ちに始まるわけでない。クモの巣に乗って地獄を脱出するなどという話は、仏教の伝承を大いに逸脱している。ブツダがクモを地獄へ送ったのは、地獄で苦しんでいる者たちに「ひたむきな信仰」を起こさせるためであつて、脱出用具を提供するためではない。

それに、地獄で苦しんでいる者の身体が救出されて地上世界へ移動するということは、仏教世界観の根幹を成す二つの原則に矛盾し、理論的にも成り立ちえない。ここで二つの原則と言うのは、「行いには必ず報いがあること」(因果應報)³⁹⁾と「心は次々と移動すること」(轉生)⁴⁰⁾であるが、地獄から救い出すというアイデアは、このような原則と相容れないのである。ケイラスの Spider-web で語られるカンダタ救出の話は、こうして一時的に仏教の伝承から外れている。

もっとも、このように一時的に仏教の伝承から外れるとはいえ、カンダタの脱出が失敗したのを契機に話は再び仏教の本筋に戻って、前と同じように「正しい教え」を身に付けることが力説される。カンダタのエピソードは意味のない逸脱ではない。むしろカンダタがまた地獄へ落ちたという事件は、「正しい教え」の重要性を確認するために使われているのである。

そもそもカンダタの話は、反面教師として語られた失敗物語であり、死にかけている大悪党に希望を持たせようとして語られたものである。⁴¹⁾このように、全体として Spider-web は仏教を伝えるために構成されている。ケイラスが語る Spider-web の主題は、「ブッダの教えを信じることの大切さ」であり、この限りでは仏教の伝承を忠実に受け継いでいる。

Spider-web の物語展開の中で、地獄で絶望的な状態にあったカンダタに救われる可能性が開けたのは、ブッダが放った光を浴びたからである。ブッダから放たれる光は、ブッダが説く「正しい教え」を象徴する。しかしながら、またとない機会に恵まれてせっかく救われかけたのに、ブッダの説く「正しい教え」がまだ身につけていなかったために、カンダタは元の地獄に再び落ちることになる。

カンダタの話の主題は「正しい教え」を信じることの大切さであり、Spider-web でカンダタが再び地獄に落ちる場面で、カンダタが無事に救出されなかった理由が明確に示されている。この男が元の地獄へ落ちたの

は、「誤った考え」をまだ捨てていなかったからであり、このことを説明してケイラスは“the illusion of self was still upon Kandata”と言っている。

At once the cobweb broke, and Kandata fell back onto hell. The illusion of self was still upon Kandata.⁴²⁾

まだ捨てていない「誤った考え」が“the illusion of self”と言われ、否定すべき self が間違っただけで肯定されていることになる。仏教の立場から否定すべきものが“self”という表現で表されているのである。ケイラスの物語の中では、しばしば“illusion”とか“conceit”とかいう表現を使って、これが存在することを否定すべきであると強調されている。Spiderweb をよく読んで長尾が見抜いたのは、“self”の語を使って極めて重要な概念を表わそうとしていることである。⁴³⁾

A3b 「アートマンは存在する」という「間違っただけ」を捨てよ

古い仏教の説話で「ブッダから放たれる光の話」で示されるのは、ブッダの教えに従うことの大切さである。そして、これこそケイラスの Spiderweb を貫く主題であり、カンダタがせつかくの機会を生かせなかった理由はただ一つ、ブッダに絶対の信頼を寄せてなかったこと、ブッダの説く真理を無条件で信じなかったことである。カンダタが再び地獄に逆戻りしたのは、「間違っただけ」を捨てていなかったからである。そして、ここで捨てるべきとされたのは、「アートマンは存在する」という「誤った考え」である。

アートマンとはインド世界で設定された精神活動の中核である。判断したり感じたりするのは、このアートマンが人間に内在するからである。インド正統派の宗教では、「アートマンこそ唯一の実在であり、それ以外のものはすべて幻である」とも言われる。このアートマンはインド的世界観

の中核を成すものであるが、19世紀末のヨーロッパではインド研究が極めて高い水準に達していた。この方面の文献の中で、ケイラスは仏教関係のものを数多く読み、仏教について正確な知識を身につけていた。⁴⁴⁾

ところで、異端の仏教で強調されるのは「アートマンは存在しない」ということである。仏教の立場では、人間存在は物質要素と精神要素がたまたま仮に結合したものに過ぎず、アートマンのような不変の実体が内在するわけではない。⁴⁵⁾「アートマンは存在する」という「間違った考え」を捨てることは、仏教体系の根幹を成す主張であり、Spider-web でも繰り返し述べられている。このアートマンを指して、ケイラスが使う英語表現が“self”である。

The man who is converted and has rooted out the illusion of self, with all its lusts and sinful desires, will be a source of blessing to himself and others.⁴⁶⁾

But you cannot be rescued unless the insense sufferings which you endure as consequences of your evil deeds have dispelled all conceit of selfhood and have purified your soul of vanity, lust, and envy.⁴⁷⁾

The illusion of self was still upon Kādata. He did not know the miraculous power of a sincere longing to rise upwards and enter the noble path of righteousness.⁴⁸⁾

“the illusion of self” とか “conceit of selfhood” とかいう英語表現を使ってケイラスが読者に伝えようとしているのは、〈「アートマンは存在する」というのが「間違った考え」である〉ということである。そして、〈「アートマンは存在しない」という「正しい教え」を身につけるべきである〉ということである。⁴⁹⁾ この点について説明する際に、長尾はケイラスの使う“self”という語を取り上げて、その著書 *The Gospel of Buddha* (ブツダの

福音)⁵⁰⁾ から引用している。

Lest the fundamental idea of Buddha's doctrines be misunderstood, the reader is warned to take the term "self" in the sense in which Buddha uses it. The "self" of man can be and has been understood in a sense to which Buddha never have made any objection. Buddha denies the existence of "self" as it was commonly understood in his time; he does not deny man's mentality, his spiritual constitution, the importance of personality, in a word, his soul. But he does deny the mysterious ego-entity, the *âtman*, in the sense of a kind of soul-monad which by some schools was supposed to reside behind or within man's bodily and psychical activity as a distinct being a kind of thing-in-itself, and a metaphysical agent asumed to be the soul.⁵¹⁾

ケイラスが英語の "self" で表そうとしたアートマンは、その存在を否定することが仏教で強く主張される。「アートマンは存在しない」という命題こそ、仏教の世界観を根幹を表すものである。この命題を真底から理解してひたむきにブッダをを信じることこそ、それぞれ世界観の面と信仰の面で、ブッダの教えに従う人々が実践しなければならないことである。

長尾は正統な文献学の方法を取り、テキストの入念な分析に基づいて、この作品で描かれている体系を確認した。そして、これは正に仏教の体系そのものであり、「無我説」と「ブッダへの信頼」の二つは、世界観の面と信仰の面で仏教体系を根幹から支えるものである。長尾が Spider-web の内容を忍耐強く検討した結果、「無我説」と「ブッダへの信頼」の二つの点を中心に、話が展開されていることが分かった。

長尾の言う「無我説」とは、「アートマン（我）は存在しない（無）」という主張」のことである。仏教の体系では、「アートマンは存在しないと

いう主張⁵²⁾と「ブッダへの信頼」こそ、それぞれ世界観の面と信仰の面で、果たすべき「正しい行いの道へ入っていくことの大切さ」の実践である。

ケイラスのテキストの分析を通じて、長尾は Spider-web の主題を明らかにした。それによると、この小作品の主題は「正しい行いの道へ入っていくことの大切さ」である。⁵³⁾長尾によると、ケイラスの Spider-web で強調されているのは、仏教の体系の中で最も重要視されていることである。見事な着眼である。

A3c 「間違った教え」を捨てなかったので、希有の救出手続きが無効になる

仏教で打ち立てられた体系では、普遍の法則によって「行い」は必ず「報い」を伴う。この法則に沿って、すべてが機械的に進行するのである。「悪い行い」をすると、自動的に決まる「辛い報い」は、すべて苦しみ尽くすまで止まらない。それまでは逃れようがなく、途中で打ち切ることはありえない。地獄で悲惨な生活を送っている者たちは、未来に希望を託することが難しい。

以前の人生で「悪い行い」を繰り返した連中、その「報い」として今は地獄で恐ろしい苦痛を受けている連中には救いがない。この連中からすれば、今の状況が絶望的であるというだけでなく、今の苦しみを味わい尽くした後のことを思っても、絶望感は一向に薄れることはない。地獄にいる限りは「善い行い」をする機会がなく、それに対応する「幸せな報い」を未来に期待することもできない。よりましな来世を求めて、未来に希望を託することができないのである。地獄暮らしが終わった後で限りない数の生涯が繰り返されても、何か良いことがある見込みは薄い。

ところが、現在は最も悲惨な生活をしている連中、それが終わった後の

生活にも何の期待も抱けない連中にとっても、めったにない機会がある。それはブッダが地上に出現した時であり、ブッダが微笑を浮かべて光を放った時である。その機会を逃さずブッダをひたすら信じ切り、無条件でブッダの教えを受け入れるなら、地獄を出た後に有利にことが進む可能性ができ、「究極の解放」を得て自らブッダになる道さえ開けてくるのである。⁵⁴⁾

めったにない機会に恵まれた場合にのみ起こるのであるから、これは希有の救済手続きと言えよう。ブッダに全幅の信頼を寄せ、ブッダが伝える「正しい教え」を身につける限り、この希有の救済手続きは有効である。しかしながら、このめったにない機会に恵まれても、まだブッダを信じ切れず、まだブッダが説く「正しい教え」を完全に受け入れることができなければ、この希有の救済手続きは自動的に無効になる。このように、ブッダの出現という僥倖に巡り逢うことがあっても、その機会を生かすも生かさぬも本人次第である。

ケイラスが作った仏教説話でも、ブッダが地上に出現して光が放ち、地獄の底にも届かせた。そして、「超自然力によって作り出す作業」を行ってクモを作り出し、「ひたむきな信仰」が生じさせるために、地獄にも派遣した。光を浴びてブッダの教えに無条件で従うこと、そしてブッダに頼り切ってひたすらクモの巣に縋ること、これがこの希有の機会を生かすことである。

ところが、クモの巣を伝わって上に登ろうとしていたカンダタは、大勢の者が後に続くのを見て、クモの巣が重みで破れるのを恐れ、「クモの巣を放せ。これは俺のだ」と叫んだ。⁵⁵⁾ こうして、「私のものという思い」が克服されていないことが露呈して、「アートマンは実在する」という「間違った考え」まだを捨てていないことが判明した。そして、安心しきってクモの巣に縋っていないし、無条件でブッダに信頼を寄せてもいないこと

が判明したのである。このように当然の前提が失われたので、希有の救済手続きは自動的に効力を失うことになった。⁵⁶⁾

A4a¹ Spider-web の中に「聖ペテロの母」が取り込まれたか

仏教の伝承に厳格であろうとすれば、救われる見通しがついてから果てしない時間を待たなければならない。ところが、せっかちなケイラスの Spider-web では、救済の可能性が開ける場面を実際に救済される場面に転換してしまった。何と即座の救出作業が始まるのである。こうして、地上から下ろされたクモの巣に取り付いて、カンダタが上に昇ろうとすることになる。

地上に出現したブツダが微笑んで光を放つと、地獄で苦しんでいる奴らに救済の可能性が開けるといっても、実際に救済される機会が訪れるのは、果てしなく生まれ変わった後でしかない。ブツダが光を浴びてほどなく、送られて来たクモに便宜を図ってもらって地獄を脱出するなど、そんなことを考える者は仏教世界に一人もいない。ケイラスの Spider-web が仏教伝承を受けているとはいえ、カンダタがクモに助けられて地獄を脱出する場面だけは、仏教文献ではありえないことである。⁵⁷⁾ したがって、カンダタの地獄脱出だけは、もしどこかに起源があるとすれば、仏教文献以外に起源があることになろう。

さて、ヨーロッパには「聖ペテロの母」(Sankt Peters Mutter) の言い伝えがあり、ヤコブ・グリム (Jacob Grimm) と弟のヴィルヘルム (Wilhelm) が、1815年にミュンスターの近くで聞き取っている。根性が悪いせいで、ペトロの母親は煉獄にいた。息子のペトロが引き上げてやろうとすると、ほかの連中もいっしょに付いて行こうとして、婆さんの衣服にしがみ付いた。すると婆さんは身を揺さぶって振り落とした。相変わらず根性が悪いことを知り、ペトロは母親を放り出した。

Als Petrus im Himmel ankam und sah, dass seine Mutter noch im Fegefeuer war, ward er sehr betrübt und bat: 'Lieber Herr, erlaube mir, dass ich meine Mutter aus dem Fegefeuer erlöse!' Seine Bitte ward ihm gewährt. Als nun Petrus mit seiner Mutter sich aus dem Fegefeuer erhob, um gen Himmel zu fahren, da hatten sich viel arme Seelen an seiner Mutter Rock gehängt und hofften mit herauszukommen. Die aber war neidisch und schüttelte sich, dass alle wieder herabfielen. Petrus aber erkannte daraus das böse Herz seiner Mutter und liess auch sie wieder los. Da fuhr sie wieder hinab ins Fegefeuer, wo sie noch wohl sein mag, wenn sie sich nicht gebessert hat.⁵⁸⁾

広くヨーロッパの各地で語られている民話であるが、⁵⁹⁾ ドストエフスキエ (Fedor Dostoevskij)⁶⁰⁾ やラーゲルレーヴ (Selma Lagerlöf)⁶¹⁾ のような著名な作家の作品に採られることもある。「聖ペトロの母」のヴァージョンは多いが、婆さんを地獄から引き上げるのに、地上から葉の付いた玉葱を降ろすことが多く、まれに蕪を使うこともある。玉葱を降ろして、意地悪な婆さんをを地獄から引き上げようとするのであるが、根性の悪さが直っていなかったので、この試みはうまく行かない。

さて、Spider-web を書いたケイラスは、「意地悪婆さんを地獄から引き上げる話を以前に聞いたことがある」と言っている。1901年に出版されたコルヴォー男爵 (Baron Corvo)⁶²⁾ の文選集 *His Own Image* の中に、「聖ピエトロの母ちゃん」を見つけて、⁶³⁾ ケイラスは自分の Spider-web によく似ていることに気づいてコメントを寄せた。それによると、Spider-web を執筆した時に、意地悪婆さんを引っ張り上げる話は、人が話すのを聞いて知ってはいたが、文献で読んではいなかったという。⁶⁴⁾

いずれにせよ、意地悪な婆さんを地獄から引き上げようとした話について

ては、編纂され公刊された民話集や文学作品に採られたのを読んだことはないが、「その話が語られるのを聞いていた」とケイラスは言う。意地悪で一生と通した婆さんが一生に一度だけ人参を人にやった話、人参を降ろしてもらって地獄から出ようとしたがうまくいかなかった話は、「印刷されたものを読んだことはないが、耳で聞いて知っていた」とケイラス自身が証言しているのである。

実際のところ、コルヴォーの「聖ピエトロの母ちゃん」やラーゲルレーヴの「我らが主と聖ペテロ」は、Spider-web より後で世に出たのであるから、ケイラスが読んでいたはずはない。⁶⁵⁾そして別の文章で述べていることであるが、*Karma* より14年も以前に出版された『カラマーゾフの兄弟』の「玉葱」も、その時は知らなかったとケイラスは言っている。⁶⁶⁾

そうすると、どこかで聞いた話を意識的にあるいは無意識にケイラスのSpider-web の中に取り込まれた可能性があることになる。問題はその話を誰に聞いたかということであり、どのようなヴァージョンの話であったのかということである。このような点についてケイラス自身は何も言っていないので、関連資料の中から傍証を捜し出さなければならない。

ところで、婆さんを引き上げるために地獄に降ろす野菜に言及して、ケイラスは奇妙なことに「玉葱」(onion)ではなく「人参」(carrot)と言っている。⁶⁷⁾これは何とも不可思議なことである。ヨーロッパの各地で「聖ペトロの母」が語られる際に、地獄に野菜を降ろさない場合もあるし、野菜を降ろす場合は玉葱であるのが普通であって、たまに蕪のことがあっても、人参を見かけることはない。

そもそも今ケイラスが話題にしているコルヴォーの「聖ピエトロの母ちゃん」にしても、意地悪婆さんを地獄から引っ張り上げるのに、人参ではなく玉葱を降ろしているのである。玉葱が出てくる話について語りながら、ケイラスが口にするのはもっぱら人参だけである。意地悪婆さんを引っ張

り上げる話は、なぜだかケイラスの意識の中で人参と深く結び付いているらしい。

A4a² ヴォルコンスキーが語る意地悪婆さんの話には人参が出てくる

注目すべきことに、ケイラスが身近で話を聞いた人物の中に、人参が出てくる意地悪婆さんの話をした人があるのである。1893年にシカゴで開かれた世界宗教会議で、ロシアの文人ヴォルコンスキー (Sergej Volkonskij) が総会で挨拶しているが、その際にロシアに伝わる民間伝説を紹介している。⁶⁸⁾ このヴォルコンスキーが紹介した民間伝説というのが意地悪婆さんの話である。そして、その話に出てくるのは玉葱ではなく人参である。⁶⁹⁾

ヴォルコンスキーが語った話は、本人の覚え違いがどうかは別として、人参が出てくる点が極めて特異である。したがって、たまたま宗教会議の挨拶の中で紹介されたとはいえ、ケイラスの Spider-web との関連で、「聖ペテロの母」の1バージョンとして取り上げざるをえない。これを仮に「ヴォルコンスキー版」または「人参版」と呼ぶことにする。

人参の問題については二つの可能性が考えられる。① ヴォルコンスキーは人参の出てくる「ロシアの民間伝説」を正確に覚えていた。② ヴォルコンスキーが覚え違いしていて、玉葱の出てくる話を人参の出てくる話と思い込んでいた。いずれにしても人参が出てくるバージョンが他にない以上、「聖ペテロの母」が話題になる際にケイラスが“carrot”を連発することは、この話をヴォルコンスキーから聞いたことを強く示唆する。

「聖ペテロの母」の言い伝えは、民話としてヨーロッパ中に広く拡散している有名な話である。数多くのバージョンが知られているが、ここではケイラスの Spider-web とのかかわりを考え、人参が出てくる話に注目して、ヴォルコンスキー版⁷⁰⁾を取り上げることにする。この言い伝えの内

容をヴォルコンスキーの語ったヴァージョンによって要約すると次の通りである。

〔要旨〕ある老婆が何世紀も地獄の炎の中で苦しんでいた。この世にいた頃、罪深い生活をしてきたからである。婆さんは天使に地獄の苦しみ訴え、救ってくれるようにと神に伝えてくれと頼んだ。天使からこのことを聞いた神は、生前に何か善いことをしたかどうか婆さんに尋ねるようにと言った。天使が尋ねてみると、婆さんはやっとのことで思い出した。生前に一度だけ善いことをしたことがあった。腹を減らした乞食に人参を一本くれてやったのである。

このことを聞いた神は、「人参を取って地獄へ降ろしでやれ」と天使に言った。天使がそうしてやったところ、婆さんは人参にしがみ付いた。すると、外の罪人が婆さんにしがみ付いた。次々に続く罪人たちを婆さんが蹴落とし、「人参は私のだ」と叫んだので、意地悪な性格が少しも直っていないことが分かった。婆さんは再び真っ逆さまに地獄へ落ちて行った。⁷¹⁾

コルヴォー版の場合と違って、このヴォルコンスキー版の話には、ペテロの母親は登場しない。意地悪婆さんは偉い聖人の母親ではなく、ただの百姓女に過ぎず、この点では『カラマーゾフの兄弟』でグルーシェンカが語る話と共通している。「聖ペテロの母」のヴァリエーションとはいうものの、この二つの民間伝承は「意地悪なロシアの婆さんの話」と言ってよい。⁷²⁾

さて、ケイラスは準備の段階から世界宗教会議に関心を寄せ、二つの部会の企画に協力し、会議の助言委員に任命されていたし、実際の会議では発表もしている。⁷³⁾ このようにケイラスは会議とかなりかかわっていたし、会議の参加者たちに誰よりも強い関心を抱いて積極的に付き合った。⁷⁴⁾ このケイラスのことであるから、参加者の挨拶を聞きに総会に出席したに違いない。

この総会で挨拶した際に、ロシアで民間に伝わる伝説として、ロシア人のヴォルコンスキーは「意地悪婆さんの話」を詳しく紹介したのである。⁷⁵⁾そして、ケイラスが *Karma* を発表したのは、この世界宗教会議が終わってから一年も経ってない1894年のことであった。ヴォルコンスキーから聞いた話は、ケイラスの心に特別の印象を残していたらしい。

A4a³ 意地悪婆さんの話は「間違った考え」を捨てなかった話として使われる

ヴォルコンスキーが語った意地悪婆さんの人参話は、これを聞いたケイラスが自作の *Spider-web* に取り込んだとすれば、何しろキリスト教徒の間で伝わっていた民話が仏教説話の中に使われる以上、新しい文脈の中で話の大枠と登場人物に当然ながらそれ相応の変化が生じることになる。

「聖ペテロの母」の諸ヴァージョンで語られているのは、試みられた救出作業が失敗する話以上のものではない。⁷⁶⁾ところがケイラスの *Spider-web* では、「ブツダが[微笑んで]放つ光」に始まる導入部があって、救出作業の失敗が「アートマンについての幻想」に帰せられている。この限りでは、ケイラスのカンダタは仏教世界の登場人物であり、ヨーロッパの民話に出てくる人物ではない。「間違った考え」を克服していないにせよ、ひどい意地悪で知られるわけではない。

「聖ペテロの母」に諸ヴァージョンで、意地悪な婆さんは身体を動かして、後に続く奴らに物理的力を加える。自分の体を揺さぶったり、足で蹴ったり、じたばたしたりするのである (schüttelte sich, kicked and struggled)。そして、この物理的力によって葉付き玉葱が壊れ切れる。ヴォルコンスキーの婆さんは叫びもするが、同時に蹴ったり押したりもしている。⁷⁷⁾これに対して、カンダタは叫び声を上げるが、身体を動かして物理的力を出すことがない。

芥川龍之介が不用意に扱った素材

「クモの巣を放せ。これは俺のだ」とカンダタが叫ぶだけでクモの巣は壊れる。「聖ペテロの母」の話が Spider-web に取り入れられたにせよ、その際にカンダタの行動が質的に変換されている。カンダタは身体を動かすことが一切なく、言葉を発するだけである。そして、その言葉は「間違っただけの教え」を克服していないことを露呈するものである。こうして、できの悪い者を地獄から引き上げようとして失敗する話しは、「正しい教え」を説く Spider-web の一部となったのである。

ヨーロッパで流布している「聖ペテロの母」なら、再び地獄へ逆戻りした所で話は終わりであるが、ケイラスの Spider-web では「せっかくのチャンスを生かせなかった失敗話」の例としてヨーロッパの言い伝えが流用されたに過ぎず、救出がうまく行かなかった後は、すべてが元に戻ってカンダタは以前と同じように「辛い報い」を地獄で受け続けることになる。

このように、途中で仏教の原則から逸脱してはいるものの、Spider-web は大筋で仏教の伝承を受けている。そして、*Karma* 全体が仏教を伝えようとして書かれている。カンダタは「正しい教え」を受け入れていないことが露見して、すべては元の本阿弥となった。この失敗物語は悪い手本として役立つことができ、これを聞いた瀕死の大盗賊のマハードゥータは、「私にクモの巣をつかませてください」と言って、「正しい教え」を守り抜こうと決意する。

ケイラスが説明するように、「これは俺のものだ」というカンダタの言葉は、「アートマンについての幻想」すなわち「アートマンが実在する」という「間違っただけの考え」をあらわにするものである。このことは再落下场面の直後に説明されているだけでなく、わずか100行足らずの超小作品 Spider-web の中で何度も反復されている。ケイラスが“the illusion of self”（アートマンについての幻想）という表現を使って語ろうとしているのは、「アートマンは実在しない」という仏教のアイデアである。

ブツダが光を放つ場面が続いて話を進めていたケイラスは、カンダタが直ちに地獄から救出される場面を思いついた。しかしながら、このような場面は仏教の理論に矛盾するし、実際に仏教の伝承に伝えられていない。この時にケイラスの脳裏に浮かんだのが数カ月前にヴォルコンスキーから聞いた話であったとしても不思議はなかろう。⁷⁸⁾ この話はもはや婆さんが救い出される話ではなく、大悪党が救い出される話である。婆さんの救出が成らなかったのは、生前と同じように相変わらず意地悪であったせいであったが、大悪党の救出が成らなかったのは、相変わらず「間違った考え」に固執していたからであった。仏教の伝承にはありえない話を導入しながら、カンダタを反面教師に仕立て上げて救出話を失敗話として使い、Spider-webの主旨を実現させる効果的な要因にしたのである。

A4b カンダタの「たった一度の善いこと」もヴォルコンスキー版に遡る

コルヴォー版に登場する聖ピエトロの母ちゃんも、ヴォルコンスキー版に登場するただの老女も、意地悪一筋の一生を送ってきたが、一度だけ意地悪でない行いをしたことがある。コルヴォー版に出てくる聖ピエトロの母ちゃんも、一度だけ腹を減らした乞食女に玉葱をやったことがあり、⁷⁹⁾ ヴォルコンスキー版に出てくるただの老婆も、腹を減らした乞食女に一度だけ人参をやったことがある。⁸⁰⁾ これが「[一生で]たった一度の善いこと」であった。

コルヴォー版でも、ペテロの母が登場しないヴォルコンスキー版でも、意地悪婆さんを地獄から救い出すのに、「たった一度の善いこと」がせめてもの条件になっている。そして、婆さんを救出する際には、「たった一度の善いこと」をするのに使った野菜（玉葱または人参）が引っ張り上げるために使われるのである。意地悪婆さんには珍しく、哀れな乞食女に玉

葱または人参を与えたことがあるが、地獄から救出される場面でも同じように、玉葱または人参が引き上げ用に使われるのである。

哀れな女に呉れてやった野菜は、引き上げ用に使われる野菜と同じであり、このことは「たった一度の善いこと」が話に導入された意味を示唆する。何しろ地獄から助け出してやるという最大級の恩恵を施すのであるから、意地悪づくめの一生を送っただけでは、いくら息子が天国の有力者とはいえ、あまりにも均衡を欠いている。そこで、せめて形ばかりの帳尻合わせのために、「たった一度の善いこと」が話の中に採り入れられたのである。

さて、1895年に東京で製作された単行本 *Karma* 初版は、1894年に雑誌に掲載されたのとテキストが同じであるが、1896年の再版は Spider-web の一部に改変が見られる。前世のカンダタに言及して「クモが這っているのを見て、踏み潰すのを控えた」という旨の文が新たに加えられているのである。本人に尋ねても答えなかったので、⁸¹⁾ ブッダが全知の力でカンダタの前世を見通したところ、⁸²⁾ 「たった一度の善いこと」をしたことが分かった。一度だけクモを踏み付けなかったのである。

He (Buddha) said: 'Kandata, did you ever perform an act of kindness? It will now return to you and help you to rise again. But you cannot be rescued unless the intense sufferings which you endure as consequences of your evil deeds have dispelled all conceit of selfhood and have purified your soul of vanity, lust, envy.'

Kandata remained silent, for he had been a cruel man, but the Tathagata in his omniscience saw all the deeds done by the poor wretch, and he perceived that once in his life when walking through the woods he had seen a spider crawling on the ground, and he thought to himself, 'I will not step upon the spider, for he

is a harmless creature and hurts nobody.’⁸³⁾

コルヴォー版の話でもヴォルコンスキー版の話でも、婆さんが生前に行った「たった一度の善いこと」は野菜をやることである。地獄から救出する場面では、引き上げるために野菜を降ろすが、これと同じものを飢えた乞食女に呉れてやったことがある。現在の場面で引き上げ用具として使われる野菜は、過去の場面では「たった一度の善いこと」をするのに使われたことがあるという筋書きである。

新版 Spider-web では「たった一度だけの善いこと」が「クモを踏み潰さなかったこと」であり、出てくるのは植物ではなく動物であるが、やはり同じものが地獄脱出のために使われる。ただし、「たった一度の善いこと」をする場合、野菜なら呉れてやればよいが、クモは食用にも鑑賞用にも使えないので、誰かに呉れてるわけにはいかない。そこで、クモそのものの命を助けてやることになる。野菜が小動物になっているので、それに合わせて話の細部に工夫がこらされているものの、コルヴォー版の話やヴォルコンスキー版の話と同じように、せめて形ばかりの帳尻合わせのために、「たった一度の善いこと」が話の中に採り入れられているのである。

こうして、ヨーロッパの民話「意地悪婆さんの話」では植物（玉葱/人参）が地獄に降ろされるが、ケイラスの Spider-web では動物（クモ）が地獄へ降ろされる。これは仏教の伝承で要請される話の展開である。クモが地獄へ降ろされたのは、地獄で苦しむ者たちに「ひたむきな信仰」を起こさせるために、ブッダが使いとして送り出したからである。仏教で知られている伝承の中で、ブッダが「超自然力によって作り出す作業」によって用意するものは、ブッダの代理を務めることを職務とする。したがって、心を備えた存在（人間または動物）でなければならない。⁸⁴⁾

そして、仏教伝承の枠内で話が展開する限り、「たった一度の善いこと」をここに持ち込むことは必要でない。仏教の伝承を受け継ぐ Spider-web

では、ブッダが放つ光が地獄にも届き、そこで苦しんでいる連中を元気づけて、未来に希望を抱かせるのである。ブッダが放つ光は、地獄にいる連中すべてに平等に降り注ぐ。希望はすべての者に与えられるのであって、「たった一度の善いこと」という条件は付いていない。「善い行い」をしていようといてまいと、平等に機会が与えられるのである。ここで地獄で苦しむ者に救出の可能性が生じる唯一の根拠は、ブッダが出現して光を放ったことである。

「ブッダが光を放つ」に始まる次第が描写され、またとない救済の機会が用意されて、地獄で苦しんでいる者すべてに開かれている以上、「たった一度の善いこと」という条件を導入する必然性はない。Spider-webの改訂版を出す際にケイラスが追加した部分は、物語の構成に不可欠なものではない。最初のテキストに不備があったわけではないのである。

Spider-webの改訂版を出す際にケイラスが追加した部分は、仏教の伝承を受けたものではない。実際のところ、一度だけクモを殺さなかったことが評価されて地獄の苦しみが打ち切られるような話は、仏教説話のどこにもないのである。このエピソードをケイラスがどこから思いついたにせよ、その着想を得たのは仏教伝承の外からである。そこでまた想起されるのは、「たった一度の善いこと」を婆さん引き上げの条件とし、その条件を満たして腹を減らした乞食に婆さんが人参をやった話、人参を降ろして婆さんを引き上げようとしたヴォルコンスキー版の話である。

ケイラスが *Karma* を日本で印刷させた際に、ヴォルコンスキー版の話から「たった一度の善いこと」が無意識に記憶から蘇って、Spider-webの中ほどに挿入されたい。仏教に伝わる「ブッダの光」の伝承に従う限り、わざわざこの挿入をする必要はない。それだけに、今さらながらの増補に関して、ケイラスが耳で聞いた「意地悪婆さんの母」の話、人参を降ろして婆さんを引き上げようとする話を考えざるをえないのである。改

訂版の *Karma* に10行ほどの文が追加されたことは、それで Spider-web の物語展開に重要な変化が起こらなかったにしても、ヴォルコンスキー版が伝える人參話に対するケイラスのこだわりを傍証するものであろう。

B1 芥川のオシャカサマは一貫性を欠く

ケイラスが語った Spider-web では、ブッダが放った光を浴びたから、ブッダの「正しい教え」に接する機会に恵まれたから、カンダタには救われる可能性ができた。しかしながら、ブッダの光を真に受け入れていなかったから、すなわちブッダの「正しい教え」が身につけていなかったから、カンダタが救われる可能性は断たれた。これがケイラスが語った話の核心である。⁸⁵⁾

芥川の『蜘蛛の糸』について長尾が注目するのは、素材として使ったケイラスの話から核心部分が完全に抜け落ちていることである。⁸⁶⁾ ケイラスの話で設定された事の次第は芥川の話に伝わらなかった。カンダタに救われる可能性ができたことも、その可能性が断たれたことも、仏教について知る機会がなかった日本人にとっては、⁸⁷⁾ 知るすべもなかったのである。

芥川の『蜘蛛の糸』の中で、ぶらぶらしていたオシャカサマが地獄の底を覗いたのも偶然であるし、そこにカンダタを見かけたのも偶然である。このカンダタをオシャカサマは救い出そうと取り掛かる。「罪人」の一人を自分の意志で助け出そうとするオシャカサマには、そうする能力と権限が備わっているのである。

さうしてそれだけの善いことをした報むくいには、出来るなら、この男を地獄から救い出してやろうと〔御釋迦様は〕御考へになりました。…… 御釋迦様はその蜘蛛の糸をそつと御手に御取りになつて、玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まつぐにそれを御下しなさいました。⁸⁸⁾

仏教のブッダは「行い」に対する「報い」を自分で決めることがなく、その職務は人々に「正しい教え」を説くことに尽き、後は各人の問題である。⁸⁹⁾ところが、ここで芥川が登場させるオシャカサマは、仏教のブッダからあまりにも遠い存在であり、カンダタの「善い事」に対して「報^{むくい}」を自分で手配している。そして、この絶大な権力者は権力の行使を楽しんでいて、気の向くままに地獄で苦しむ者を助け出そうとしているのである。仏教のブッダと違って、このオシャカサマは「正しい教え」を伝えることはなく、使いとしてクモを派遣することもない。地獄で苦しんでいる者のうち、たまたま目に付いた一人を助け出してやることに熱心なだけである。

仏教の伝承を受け継いで、ケイラスのクモはブッダが作り出した動物であり、人々に「ひたむきな信仰」を起こさせるために送り出される。ところが、仏教の伝承とは縁がない芥川のクモは自然の動物であり、オシャカサマがたまたま自分の側で見つけたに過ぎない。「翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります」⁹⁰⁾と言われる。そして、「御釋迦様はその蜘蛛の糸をそっとお手に御取りになって、玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御下しなさいました」⁹¹⁾と言われる。

このクモはオシャカサマの使いではないから、地獄へ遣わされることはない。そもそも芥川のオシャカサマには伝えるべき「正しい教え」がなく、地獄で苦しんでいる連中「ひたむきな信仰」を起こさせる必要もなかったのである。下の地獄にいる者を引き上げるために、オシャカサマは引き上げ道具が必要なだけである。このクモは役目は引き上げ用のロープを提供するに過ぎない。⁹²⁾

ここまですら読む限り、芥川の話に登場するオシャカサマは、地獄で苦しんでいる者の一人を救出することに熱中していて、この作業を勝手に楽しんでいる節さえある。何しろカンダタ本人に頼まれてもいないのである。

それに、このカンダタは現世で自分がやった「悪い行い」を記憶していて、⁹³⁾ 自分が地獄で苦しまなければならない理由を承知している。

ところが、オシャカサマの目論みに反して、救出される前にカンダタは再び地獄へ落ちる羽目になった。何をすることもできないのか、あるいは何をしようとしめないのか、このことについて、オシャカサマはの反応ははなはだ消極的である。「悲しさうな御顔」をして遺憾の気持ちを表すものの、ただ傍観しているだけである。何か思案することもなし、何かの行動を取ろうと心に決めることもない。

御釋迦様は極樂の蓮池のふちに立つて、この一部始終をじっと見ていらつしやいましたが、やがて韃陀多が地の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうな御顔をなさりながら、又ぶらぶら御歩きになり始めました。⁹⁴⁾

地獄を覗いた場面では、オシャカサマは地獄にいる者を助け出そうとする。頼まれもしないのに思いついたわけであるから、好きでやっているのである。それなのに別の場面では、カンダタが再び地獄へ落ちて、手を出そうともしない。このように、この作品では異質な二人のオシャカサマが登場しているのである。これでは、読者は大いに戸惑う。

少し前まであれほど熱心に救い出そうとしていたのに、ここへ来てオシャカサマは急に性格が変わってしまった。あれほど救出に熱心であった前の場面と違って、今度は救済に熱中することがない冷静な観察者に一変するのである。カンダタが再び地獄に落ちることにオシャカサマが関与していないのであるから、少し前まであれほど好き勝手に地獄にいる者を救い出していたのに、ここへ来て唐突に人が変わっている。こうして、同一の物語に全く異質のオシャカサマが登場することになった。その結果として物語展開に一貫性が保たれず、話の構成に重大な破綻が生じている。

B2『蜘蛛の糸』では、一度だけクモを殺さなかったせいで地獄から救われる

芥川のおしゃかさまがふと蓮池の下をのぞいて見ると、地獄の様子がはっきりと見えた。⁹⁵⁾ その地獄の底に、ほかの罪人に交じって、カンダタという男がごそごそ動いていた。⁹⁶⁾ 殺人や放火など悪の限りを尽くした男であったが、一回だけクモを踏み潰さなかったことがあった。⁹⁷⁾ このことを思い出して、おしゃかさまはこの男を地獄から救い出してやろうと考えた。

御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この韃陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思ひ出しになりました。さうしてそれだけの善い事をした報には、出来るならこの男を地獄から救ひ出してやろうと御考へになりました。⁹⁸⁾

大勢いる「罪人」たちの中から一人だけ選んで、おしゃかさまがカンダタを地獄から救い出して極楽へ移してやろうとしたのは、一つだけ「善い事」をしたからである。クモを踏み潰さなかったことがあるからである。これが「善い事」とおしゃかさまが判定し、その「報」として地獄からの救出を考え、引き上げ用具としてクモの糸を極楽から下ろした。

一度だけクモを殺さなかったことが原因となって、地獄の苦しみが打ち切られて、極楽行きという結果さえもたらされる。⁹⁹⁾ なにしる、芥川の地獄も極楽も仏教の伝承を無視して構想されているから、少し距離があるものの互いに続いているのであり、¹⁰⁰⁾ 交通手段さえあれば移動することができるのである。それに、芥川のおしゃかさまも仏教とは無関係に思いついたものであるから、¹⁰¹⁾ 「正しい教え」などを伝えることなどせず、カンダタの「善い事」にふさわしい「報」を自分の判断で勝手に決めている。

ただし、そのように展開した話に不自然な点があると、せっかくの創作が失敗作になる恐れがある。新しい物語を創作するといっても、芥川は密かにケイラスの Spider-web を下敷きにしている。ところが、芥川は

Spider-web の主旨を理解していなかったために、わけも分からずに好き勝手に話を展開している。その結果、本人を自覚していないところで、話に不整合な点が生じるのは避けられない。

そして、このオシャカサマの好き勝手な判断では、殺人と放火に終始した者が一度だけクモを殺さなかったという原因にふさわしいのは、極楽行きという結果であった。極大の悪をもつぱらにした者の極小の善は、極大の成果を上げることになったのである。芥川のオシャカサマの考えることは、何ともバランスを欠いていて、全く常軌を逸している。

さて、日本で印刷された単行本 *Karma* の再版には新たに挿入があり、第4章 Spider-web で10行ほどが付け加えられる。カンダタを地獄から救出する前に「一つだけ善いこと」をしたかどうかをブッダは確かめようとするのである。1894年に雑誌に出た時にも、1895年に単行本の初版が出た時にも、この部分はテキストになかった。芥川はケイラスの書いた文章を直接に読んだわけではなく、鈴木大拙¹⁰²⁾の手になる日本語訳¹⁰³⁾を読んでいる。そして、翻訳者の鈴木がこの際に使ったのは、「一つだけ善いこと」の部分が追加された改訂版のテキストである。¹⁰⁴⁾

仏教の伝承を受けた Spider-web には、「ブッダが放つ光」に始まる導入部があって、カンダタが救出されるようになる伏線が用意されている。カンダタが救出される可能性ができたのは、ブッダの光を浴びたからである。この光は地獄で苦しむ者すべてに届き、一つだけ善いことをした者も、一つも善いことをしなかった者も、全く同じように扱われる。仏教の伝承に従う限り、「たった一つだけ善いこと」の部分は欠かせない要素ではない。¹⁰⁵⁾

ところで「聖ペテロの母」の二つのヴァージョンでは、地獄から意地悪婆さんを救い上げる条件として、「一つだけ善いこと」が言及されている。日本で印刷された *Karma* にケイラスが「一つだけ善いこと」の部分挿

芥川龍之介が不用意に扱った素材

入したのは、仏教伝承を受け継ごうとしたからでなく、ヴォルコンスキーから聞いた意地悪婆さんの話が意識の底から蘇り、「一つだけ善いこと」に連想が及んだのであろう。

この「たった一つだけ善いこと」の部分はもともと Spider-web のテキストにはなかったものである。この部分の追加なしに、話の展開は成り立っていたのである。そして、「たった一つだけ善いこと」の部分が追加された後も状況に変化はなかった。地獄の底で苦しむ者たちに希望が出てきたのは、ブッダが真理の光を放ったからであり、ケイラスの話は最初からそのように構成されていたのである。¹⁰⁶⁾

しかしながら、素材の構成を理解するすべもない芥川にとって、この追加された部分こそカンダタの唯一の頼りであった。こうして、「一度だけクモを殺さなかったこと」が地獄からカンダタを救出する根拠となった。他の場合と同じように、このような不条理が生じたのは、作者の芥川が素材の主旨を理解で出来ず、理解する気もなかったからである。何も分からないまま、ここでも芥川は自分の筋書きを思いついた。

その結果、極大の悪を具現する者の極小の善に、極大の幸せが配置されることになった。こうして、『蜘蛛の糸』の構成を考え出した芥川は、カンダタに起こったことが語られる話の冒頭に、はなはだバランスに欠ける記述を意味なく組み入れることになった。これに始まって、物語の破綻は收拾がつかないものとなる。常軌を逸して人助けに熱中するオシャカサマは、何が起っても手を出そうとしない無関心なオシャカサマに急が変わるのである。

B3a 鈴木大拙は“the illusion of self”を「我執の妄念」と訳す

長尾が言うように、ケイラスの作品 Spider-web の主題は「ブッダの教えを信じることの大切さ」であり、ブッダの教えの根幹を成すのは、「ア

ートマンは存在しない」という「正しい考え」である。ケイラスの語った話では、救われかけていたカンダタが再び地獄へ落ちたのは、ブッダの教えを信じていなかったからであり、「アートマンは存在しない」という「正しい考え」が欠けていたからである。

ところが一方、この Spider-web を翻案した芥川の『蜘蛛の糸』では、「自分ばかり地獄から抜け出そうとする、韃陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったの[です]」と言われる。芥川の語った話では、救われかけていたカンダタが再び地獄へ落ちたのは、「無慈悲な心」のせいである。「他人に対する思いやり」が欠けていたために罰せられたのである。

さて、仏教の文献でよく言われる「アートマンは存在する」という「間違った考え」は、中国語では「我執妄念」（アートマンにこだわる迷い心）と訳された。ここで「我」は一人称代名詞ではなく、サンスクリットの“ātman”に便宜的に当てたものである。そして、芥川が使った鈴木の本語訳『因果の小車』でも、ケイラスの Spider-web でよく見られる“the illusion of self”（「アートマンは存在する」という「間違った考え」）は、中国の翻訳伝統を受け継いで「我執の妄念」となっている。¹⁰⁷⁾

「去れ去れ此の糸は我がものなり」と覺えず絶叫したりしかば、
糸は立刻に斷絶して其身はまた舊の奈落の底にぞ落ちたりける 我
執の妄念は尚ほ韃陀多の胸中に蟠わだかまり居りたりしなり、……¹⁰⁸⁾

したがって、中国の仏典翻訳伝統を考慮に入れる限り、“the illusion of self”というケイラスの英語表現の訳として、鈴木「我執の妄念」は間違いとは言えない。日本語の文の中で一カ所だけ「我執の妄念」という中国語的な表現が混在していると考えれば、「元の地獄へ落ちたのは、我執の妄念がまだ心の中につかえていたからだ」と言えないこともないのである。

芥川龍之介が不用意に扱った素材

問題は「我執の妄念」という中国語的な表現が教養ある普通の日本人に通じるかどうかである。鈴木は通じるつもりでいたのであろうが、芥川には全く通じなかった。この部分が『蜘蛛の糸』でどう表現されているかという、「無慈悲な心が、罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまった」となっている。素材のテキストに明記されている「アートマンは存在するという間違っただけの考え」はどこかへ行ってしまって、素材のテキストにない「無慈悲な心」が新しく現れているのである。

さて、中国語の仏教表現を通じて、「我執」という中国語表現は日本にも入って来た。そして、仏教文献を読む訓練を受けていない日本人も、この表現を目にすることがあった。この人々は中国語仏典の読み方を知らないから、「我執」という中国語表現を見ても、語を構成する漢字「我」（自分）と「執」（こだわる）の意味を組み合わせるしかなかった。こうして、「我執」という中国語表現は日本語に借用され、仏典の中国語とは関係のないところで、日本語独自の用法が確立したのである。

日本語に借用された「我執」という語が表す意味は、「自分だけの小さい考えにとらわれて離れられないこと」であり、¹⁰⁹⁾「自分の都合にこだわること」である。「我執を捨てよ」という仏教文献の言葉を日本人が読めば、「わがままはやめなさい」とか「他人に思いやりを持ちなさい」とかいう意味になるのである。鈴木は翻訳『因果の小車』では、このような日本語世界の事情が考慮されておらず、この点では適切な日本語訳とは言えない。

外国語の単語を使って読者を煙に巻くつもりは鈴木になかったのかも知れない。下手に訳語を工夫して不要な誤解を招くのを避けて、中国語の原語をそのまま出してテクニカルタームとして使ったつもりであろうが、¹¹⁰⁾これが功を奏するには整っているべき状況がある。原語の用法を知る機会が読者に与えられていなければならないし、知ろうとする意欲が読者にな

ければならない。ヨーロッパと違って日本には高い水準の仏教研究がないし、ヨーロッパ人と違って日本人は異文化としての仏教に関心がないのであるから、この方法に効果があるはずもない。はたして鈴木在意図は芥川に通じず、ケイラスの文章は置き去られた。長尾がいみじくも言うように、とんでもない「独自の脚色を行う」¹¹¹⁾ ことになってしまったのである。

「アートマンは存在する」という「間違っただけ」を放棄することは、ケイラスの作品 Spider-web の中心課題である。そして、この短い話の中で三つもの文を挙げて強調しているが、¹¹²⁾ それぞれの文を鈴木は次のように訳している。これを見れば分かるように、鈴木が翻訳と称して読者に提供しようとしているのは、日本人としてまともに教養を身に付けた者には意味をなさない文章である。

真の教に歸して、我執の妄念を芟除したるものは、一切の情念罪欲を離れて、自他利生、円満ならずと云ふことなし。¹¹³⁾

されど汝は罪業の應報によりて厳しく苦しめられ、これによりて始めて一切の我執を脱し、貪瞋癡の三毒を洗ふにあらざれば、永劫解脱の期あるべからず。¹¹⁴⁾

我執の妄念は尚ほ韃陀多の胸中に蟠まり居りたりしなり、彼は上の方に登りて正道の本地に至らんとする決定信心の一念に如何なる不思議の力あるかを解せざりしなり。¹¹⁵⁾

こんな文章を眺めて、芥川は何となく分かったような気になり、これを基に新機軸の「御伽噺」を書いてやろうと一大決心を下したのである。軽率であった。鈴木の記事は中国文献の書き下し文ではなく、英語文献の日本語訳のつもりである。わざわざこんなものを読まずとも、ちゃんと元のテキストを読みさえすれば、ケイラスの主旨を少しは理解できたかも知れない。そして、それでも理解できなかったとすれば、あるいはそれなりに理解できたとしたら、これを基に斬新な「御伽噺」を作ろうなどという無

謀な野望を抱くことはなかったであろう。¹¹⁶⁾

B3b 芥川にとって、鈴木「我執」は「無慈悲」の同義語である

ほかの日本人と同じように、芥川は「我執」という語を中国語仏教術語としてとして覚えていたわけではないから、これを目にした際にできることといえば、日本語に定着していた借用語としての用法に添って、「自分[の都合]にこだわること」の意味で理解するより外なかった。

芥川は「自分ばかり地獄から抜け出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまった……」¹¹⁷⁾と
言うが、この文に見える「無慈悲」は、鈴木訳で「我執」の語を読んだ芥川
の頭に浮かんだ自然の反応と言えよう。日本語の「無慈悲」と「我執」
は同義語であり、同じように「他人に思いやがない」という意味を表す。

このように、芥川はケイラスの構想を打ち破るつもりもなかったし、自
らの発想を持ち込むつもりもない。Spider-webの主旨を故意に無視して、
独自の主題を打ち出そうとしたわけではないのである。芥川の『蜘蛛の糸』
の中で、カンダタが地獄へ再落下した理由が「無慈悲」とされるのは、
「ブッダの教えに従わなかったこと」というケイラスの考えをわざと退け
て、独自の着想を打ち出そうとしたからではない。芥川自身としては、鈴
木訳のケイラスを忠実に移しているつもりなのである。

「我執」という中国語を理解するのに、日本語に定着していた借用語と
しての用法に添ったのは、『蜘蛛の糸』の作者だけではなかった。芥川と
同じように、芥川の読者も「我執」という借用語を使っているのである。
鈴木訳の『因果の小車』で「〔犍陀多の〕我執の妄念」という表現を見て、
片野達郎はこれを芥川の「犍陀多の無慈悲」と同一視して、「原作の主張
を忠実に伝えたものと見ることができよう」と言っている。

「自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、

さうしてその心相当な罰を受け」たとする批判は、韃陀多が「我執の妄念」によって応報をうけ、「一縷の糸は忽ち断滅し」たとする原作の主張を忠実に伝えたものと見ることができよう。¹¹⁸⁾

このことから知られるように、ケイラスが正確に仏教から継承した「我執の妄念」の意味（「アートマンにこだわる迷い心」）は、作者の芥川の場合と同じように、読者の片野にも全く伝わっていない。そして、日本語に定着した借用語「我執の妄念」として受け取られているのである。「〔韃陀多の〕我執の妄念」という中国語表現を「韃陀多の無慈悲」という日本語表現に転換したのは、芥川の個人的な好みによるものではなく、日本語世界に普遍的な事象なのである。

本人の意図はともかく、素材に明記されている理由は芥川に伝わらず、素材にない理由が導入されることになった。ケイラスと違って、仏教研究の蓄積がない日本で育った芥川は、当然ながら仏教について知らず、知ろうとする気もなかった。仏教研究の成果に基づくケイラスの発言の主旨を測りかね、せっかく手に入れた素材を日本の常識に即して読み違えるしかなかったのである。

仏教の伝承を踏まえた Spider-web では、カンダカが地獄から逃げ出す機会が奪われるのは、ブッダの説く「正しい教え」がまだ身につけていなかったせいであった。ところが、芥川の『蜘蛛の糸』では「無慈悲」のせいということになったのである。カンダカが再び地獄に逆戻りしたことについて、仏教に馴染みのない芥川は、仏教を伝えようとするケイラスと全く違った理由を挙げることになったのである。『蜘蛛の糸』の言葉は「原作の主張を忠実に伝えたもの」ではなく、鈴木 of 日本語訳を読み違えた片野は間違った判断を下している。¹¹⁹⁾

仏教の伝承を受けてケイラスが “[to] root out the illusion of self” とか “[to] dispel all conceit of selfhood” とか言う場合、¹²⁰⁾ 長尾の言うよう

芥川龍之介が不用意に扱った素材

に「世界観の根本的な転換」¹²¹⁾が語られているのであって、「わがままをやめること」/「思いやりを持つこと」のような日常の心掛けが話題にされているのではない。しかしながら、仏教の伝承など知ったことではない芥川にとって、ケイラスの主旨は想像を絶するものであり、鈴木の一語の中に「我執を脱す」を見て、ケイラスが再び地獄へ落ちたのは「無慈悲」のせいということになる。そして長尾の言うように、「韃陀多の無慈悲な心が、…… 罰をうけ[た]」[という言葉]は、「原作の主題を無視して書かれたものであ[り]」、このように「糸をつかむというところだけを取り出して独自の脚色を行うと論理的に破綻してしまう」¹²²⁾のである。

芥川が素材を離れて新しい物語を作ろうとしているなら、それはそれでよい。しかしながら、何か特別の意図があって芥川は「無慈悲」という理由を持ち込んだわけではなく、素材のテキストを読み損ねたに過ぎない。作品全体の構成を考えた上で、素材とは違った意図を提示しようとしているわけではないのである。そうすると、キーワードが別のものに取り替えられたせいで、物語全体に展開にひずみが生じた可能性があり、この点から芥川の物語を検討する必要があるだろう。

素材の主旨を理解できないまま、素材の核心を成す要素を落としたり、素材になかった要素を新たに加えたりすると、作者の意図しないところで、物語の展開に一貫性が損なわれる危険がある。この点で翻案を試みる作者はよほど注意深い知恵者でなければならないし、よほど深い教養を備えた人物でなければならない。残念ながら『蜘蛛の糸』の作者はそのような人物ではなかった。

B4a 何も知らないまま、芥川のカンダタは「無慈悲」のせいで罰せられる

ケイラスが作った物語 Spider-web では、「地獄の連中にも希望の光が差

すことがある」という仏教の伝承が語られている。¹²³⁾ このめったにない機会を生かすには、ブッダに絶対の信頼を寄せ、「正しい教え」を受け入れなければならない。¹²⁴⁾ この条件が満たせるように、ケイラスのカンダタには幸運な状況が用意されていた。ブッダが光を放って「正しい教え」を伝え、クモを使いとして送って「ひたむきの信仰」を生じさせていたのである。¹²⁵⁾ このような幸運に恵まれながら、カンダタはせっかくの機会を生かすことができず、希有の救出手続きは途中で破綻することになった。¹²⁶⁾ Spider-web は失敗物語である。

ところが仏教に馴染みがなかった芥川は、仏教の伝承を踏まえたケイラスの主旨を理解できなかった。そこで、「たまたま見かけたカンダタにオシャカサマが憐れみをかけた」という状況を設定し、「自分だけ助かろうとするカンダタの無慈悲な心が罰せられた」という状況を設定することになった。こうして、カンダタはオシャカサマから「思いやり」をかけられ、自らも「思いやり」を寄せることを期待されているのである。

芥川のオシャカサマがケイラスのブッダと決定的に違うのは、カンダタに対して何の働きかけもしないことである。それどころか、このオシャカサマはカンダタと一言も言葉を交わしていない。ケイラスのカンダタと違って、芥川のカンダタは真理の光を浴びたわけでもないし、ブッダから声を掛けられたわけでもない。何げなく地獄の空を眺めていると、クモの糸が自分の上に垂れていたのに気づいたのに過ぎず、¹²⁷⁾ これを垂らしたのが誰かも知らない。それどころではなく、芥川のカンダタはオシャカサマの存在すら知らないのである。

この世に生きていた頃、芥川のカンダタはもっぱら人殺しや放火など「いろいろ悪事を働い[ていた]」。¹²⁸⁾ そして死んで地獄へ来てからは、「血の池に咽びながら、まるで死にかかった蛙のやうに、唯もがいてばかり居りました」のである。¹²⁹⁾ 今までオシャカサマとはかかわりのない生活をし

芥川龍之介が不用意に扱った素材

ていたのである。この点ではケイラスのカンダタも同じようなものであるが、それだからこそブツダは積極的に働きかけ、地獄まで届くように真理の光を放つのである。

このように、「思いやり」に欠けるという理由で厳しい罰を科された芥川のカンダタは、「思いやり」が大事であることを事前に知らされていなかったし、「思いやり」を身につける機会も与えられていなかった。ケイラスのブツダと違って、芥川のオシャカサマはカンダタに何も教えていない。それどころか、何の連絡もないまま、すべて独り決めでカンダタの地獄救出を企画し実践したのである。

カンダタが地獄の苦しみを切り上げさせるべきがどうか。芥川のオシャカサマはそれなりに審査をしている。この世に生きていた時にカンダタが一度だけクモを殺さなかったことをオシャカサマは思い出し、地獄から救出してやるに値する「思いやり」をカンダタが備えていると判断したのである。ところが、地獄脱出の途中で外の「罪人」たちを怒鳴りつけたという理由で、芥川のカンダタは「罰」を受けている。オシャカサマの判断が間違っていたことになるが、この点は不問に付せられて、何も知らされていないカンダタが罰せられることによって問題が解決したことになり、それでオシャカサマも納得したのか「又、ぶらぶら御歩きになり始め[る]」のである。¹³⁰⁾

芥川に独自の主旨があって、それを読者に理解させる工夫ができなかったのではない。鈴木訳によって素材を正確に理解していると思っていたのであるから、独自の主旨などあったわけではない。芥川は自覚しないまま素材を誤解し、自分で気づかずに独自に話を進めたのである。素材の主旨が分からず、自分の主旨もなかったのであるから、一貫性のある話を話を展開できるはずもなかった。

B4b 芥川の仏教理解は「旧約的じみている」と堀米庸三は言う

『蜘蛛の糸』について堀米庸三が興味深い発言を新聞に寄せている。芥川の仏教理解を「旧約的じみている」と批判する堀米は、子供に読ませる読みものとして『蜘蛛の糸』が不適当な作品であると主張する。芥川の仏教理解が片寄っていると考える堀米は、「無慈悲」を理由に「その心相当の罰」が科せられるのが気に入らないのである。

私にはこの文章に示された芥川の仏教理解そのものが旧約的じみている問題だと思われるのだが、ともかく宗教を小学生にわからせることは至難の業であろう。¹³¹⁾

教育問題に熱心な堀米は、教科書について論じる際に、評判のよい教材『蜘蛛の糸』を批判的に取り上げる。カンダタが「無慈悲」ゆえに地獄に再び落とされることについて、芥川の仏教理解が「旧約的じみている問題だ」と堀米は言う。キリスト教と無縁な作品に言及して「旧約的じみている」という表現を使うのはいささか不穏当ではあるが、とにかく堀米はカンダタが罰せられる場面が気に入り、地獄から救い出される途中で「無慈悲」ゆえに厳しく罰せられるのに戸惑いを覚え、救いが唐突に断ち切られてしまうのが納得できないのである。

「御釈迦様の御目から見ると、」カンダタの「無慈悲な心」が罰せられて再び地獄へ落ちたことは「浅ましく」思える。¹³²⁾ しかしながら、カンダタはクモ殺しを控えたことがあった。一度だけとはいえ「思いやり」を發揮したことがあったので、地獄から救い出してやろうとオシャカサマは決心したのである。ところが、「無慈悲な心」のせいで再び地獄へ落ちる場面では、「思いやり」を向けるように期待されているのは、カンダタ自身よりも一ランク上の悪党、クモ殺しを一度も控えたことさえない悪党である。しかも期待されているのは、自分を犠牲にする危険の冒す「思いやり」である。オシャカサマの態度は筋が通っていない。

そんな悪党を思いやらなかったのが、カンダタは再び地獄へ落とされる。「どな悪党であろうと、無差別に思いやるべきである」という立場をとっているかのようである。相手が誰であろうと、自分がどんな犠牲を払おうとも、「思いやり」をなおざりにすことは許されず、罰は逃れられない。したがって、この無差別の「思いやり」はカンダタに向けられることはありえない。堀米から見ると、このような「芥川の仏教理解」は「旧約じみていて問題だと思われる」のである。

ところが、カンダタが再び地獄へ落ちるのを放置したオシャカサマは、芥川が発明したのではなく、ケイラスのブッダを移そうとしたものである。ケイラスが受け継ぐ仏教の伝承によれば、ブッダの任務は「正しい教え」を伝えることに尽き、後のことは知ったことでない。「間違った教え」の放棄を前提とする「希有の救済手続き」は、その前提が欠ければ自動的に無効になり、そのことについてブッダは手の打ちようがないし、手を打つ立場にもない。

ケイラスが語る Spider-web でカンダタが再び地獄へ落ちたのは、自動的にことが進行した結果に過ぎず、¹³³⁾ ブッダが罰を加えた結果ではない。芥川はカンダタが地獄に落ちる場面が気に入り、これをせひとも自作の『蜘蛛の糸』に移そうとした。しかしながら、芥川がこの場面を移そうとしたといっても、ブッダが真理の光を放つなど肝心の点には気づかなかつたのであるから、ケイラスの説明することの次第をすべて無視した上で、いわば状況を全く把握しないままに、芥川は地獄落下の場面を何とか自作に移したのである。

芥川は物語のハイライト場面をケイラスから採りたかったのであるが、その操作ははなはだ曖昧にならざるをえなかった。ケイラスの記述を見る限り、仏教の原則に従ってブッダは地獄落ち場面に干渉していない。この場面を移す以上、カンダタの地獄落ちをオシャカサマの決断に帰すわけに

はいかない。とはいうものの、「法則」によって機械的にことが進行するという異文化の原則は、芥川の知ったことではない。しかしながら、カンダカの落ち度で起こった以上、地獄落ちは罰でなくてはならない。このディレンマに芥川自身は気づいていない。

芥川テキストでは、カンダタは自分の落ち度のせいで罰を受けた（「無慈悲な心が、…… 罰をうけて」¹³⁴⁾）。そしてオシャカサマは成り行きを傍観している（「この一部始終をじつと見ていらつしやいました」¹³⁵⁾）。カンダタが罰せられたのは確かであるが、だれが罰したのか分からないのである。こうして、罰することを決断し実行した者がいないまま、地獄落ちという最も重い罰が執行されるのである。自分では自覚しないまま、芥川は大きな混乱に陥っている。

少し前の場面ではカンダタを地獄から引き上げてやろうとあれほど熱中していたオシャカサマは、「無慈悲」ゆえにカンダカが厳しく罰せられるのを「浅ましく思召された」のである。これが芥川の「仏教理解」であるとなれば、「旧約的じみていて問題だと思われる」と堀米が言うのはもつともである。ただし、芥川の「問題」は「仏教理解」にあるというよりも、素材を読み取る能力にある。読み取れなかったので「独自の脚色」（長尾）¹³⁶⁾を試みたにしても、何しろ本人にその自覚がなかったので、物語全体の整合性が損なわれたことに気づかなかった。芥川が作り出した物語の筋書きは破綻するしかなかったのである。

B5a『蜘蛛の糸』では、極悪非道の男が「思いやり」を試される

芥川が考え出した筋立てを追うと、「思いやり」を欠くことは最も恐ろしい罰に相当する重罪であり、極楽の楽しさを取り消して地獄の苦しみを再体験させるのがふさわしい。カンダタがこの罰を科せられたのは、自分のことしか考えない「無慈悲な心」のせいである。「思いやり」の欠如を

芥川龍之介が不用意に扱った素材

戒めることが作品の主旨であるとするれば、作者は適切な主人公を登場させているであろうか。

芥川のクモは自然の生物であり、ケイラスのクモと違って、超能力を備えた存在ではない。そもそも、ケイラスのカンダタと違って、芥川のカンダタはクモの糸がどこから来たのかも知らされておらず、無条件で頼り切るいわれがない。芥川のカンダタには、自分の判断の外に拠り所がないのである。その糸の強度は一人を支えられるかどうかも確かでないのに、何千人もが後から付いて来るのである。このクモの糸のか細さと後に続く者の多さを考えると、ただただ恐怖に打ち拉がれる外ない。

自分一人でさえ断れそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪へる事が出来ませう。もし萬一途中で断れたと致しましたら、折角ここへまでのぼつて来たこの肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落とりに落ちてしまはなければなりません。そんな事があつたら、大変でございます。が、さう云ふ中にも、罪人たちは何百となく、何千となく、まつ暗な血の池の底から、うようよと這ひ上がつて、細く光つてゐる蜘蛛の糸を、一列となりながら、せつせとのぼつて参ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまふのに違ひありません。¹³⁷⁾

このような場合に、自分の置かしている立場を知らされていないカンダタにとって、あとに続く「罪人」たちに無制限の「思いやり」をかけることは、自身を犠牲にする覚悟が必要であろう。クモの糸が切れてしまう危険があり、そうなれば自分が脱出する可能性が消えるのである。このような状況の中で敢えて「思いやり」デストに挑もうとする者がいるとすれば、これはかなりできた人物であろう。

また、カンダタが再び地獄へ落ちざるをえなかったことを納得するように、ケイラスの読者は誘導されている。ケイラスが用意した舞台では、ブ

ッダの放った光が地獄の底まで届き、そこにいたカンダタも「正しい教え」に接する機会に恵まれ、こうして救出される可能性が開けた。¹³⁸⁾ところが、まだ「正しい教え」が真に身に付いていないことが途中でばれたので、希有の救出手続きは無効になった。¹³⁹⁾

これとは違って芥川の読者は、このような誘導はされていないのであるから、「普遍の人間性」に即して判断するか、現代日本で通用している常識で判断するしかない。そうすると、便乗しようとする厚かましい連中を怒鳴りつけるのは、緊急避難のためにやむをえなかったということにもなりかねない。この状況でテストに参加するのも、やはりかなりできた人物であろう。

いずれにしても、芥川の『蜘蛛の糸』で設定されているのは、容易ならざるテストであり、最も高い倫理基準が示されている。ところが、それを切り抜けると期待されているのは、それほどできた人物ではない。それどころか、極めて反社会的な人間であり、最も低い倫理水準の人物である。しかも、この男は脅えているのである。¹⁴⁰⁾このように、オシャカサマが究極に高い倫理基準を満たすと期待しているのは、究極に倫理基準の低い脅え切った男である。

『蜘蛛の糸』に登場するオシャカサマは、そういう見当外れな期待をしておいて、思い通りに行かなかったからといって、「悲しさうな御顔」をしたり、¹⁴¹⁾「浅ましく思召」たるするのである。¹⁴²⁾このオシャカサマは「無慈悲」であるかどうかはともかく、少なくとも人間性の観察に優れているとは言えない。『蜘蛛の糸』で芥川が描くのは、このようなオシャカサマである。

カンダタは大物の強盗であって、殺人と放火を繰り返して一生を終えた。多くの人間の中でも最悪グループに属する。一生に一度だけクモを殺さなかったことがあったが、その後もクモや人間を殺し続け、それを反省した

芥川龍之介が不用意に扱った素材

り改悛の情を示したことはただの一度もない。

こんな極悪非道の極みとも言うべき男を登場させて、外の人々にも気を配ることを期待するとすれば、これはお門違いもいいところである。この男は一度だけクモ殺しを控えたことがあったが、それをきっかけに「慈悲」の心が備わったわけではなく、残忍な行いの数々を悔やんだことさえなかった。そして、この方面で訓練を受ける機会もなかった。地獄からの救出を交換条件に真人間になる取引があったわけでもない。

クモを殺さなかった時に「いくら何でも可哀さうだ」と思ったのは確かであるが、それは一度だけのことであり、たまたま見かけた一匹のクモに対してそういう思いを抱いたに過ぎない。カンダタはクモ殺しを控えたことはあるが一度だけであり、それ以後も死ぬまでクモ殺しも人殺しもやめていないのである。何しろ死ぬまで強盗を生業としてきた男である。

そんな人間に「慈悲」を期待するとすれば、人間性に対する洞察に欠けると言うほかに、クモをめったに殺さず人を一度も殺さない並の読者を説得することはできまい。そのようなカンダタの話を読んで、人殺しの習慣がない並の読者が我が身を振り返り、身を正す気になるであろうか。あるいは、人間の真実を抉る話と評価して、作者の深い洞察に感動するであろうか。しかも、今この男は絶体絶命の窮地にあるのであるから、文脈を考えればなおさらのことである。

B5b カンダタは「普通の人間」に反省材料を提供すると吉田精一は言う

芥川に好意を抱く読者は多いが、その一人から寄せられた感想をここで参考までに取り上げてみよう。吉田精一は『蜘蛛の糸』に言及して、これを書いた作者の芥川を弁護する。この吉田によると、『蜘蛛の糸』の焦点は「普通の人間」に反省の材料を提供することにあるという。「普通の人

間」をカンダタの立場に身を置かせて反省させるというのである。

この作品の焦点は、われわれ普通の人間がカンダタのような立場に立った場合、自分ならどうするかという反省を強いるところにある。¹⁴³⁾

しかしながら、芥川の『蜘蛛の糸』に登場するのは「普通の人間」ではなく、人殺しや放火を繰り返して人生を送った「普通でない人間」である。そして、そのような究極の極悪人に期待されているのは、究極の自己犠牲の行為である。究極の極悪人の立場に「普通の人間」が立つことはできないし、究極の高潔な行為を敢行する立場に「普通の人間」が立つこともできない。究極の悪を具現する男に究極の善の実践が期待されているわけであるから、こんな話を「普通の人間」が「反省」の材料にすることなどできるはずがない。吉田の言っていることは見当違いである。

それに、芥川のカンダタは「慈悲の心」が欠ける悪党であるだけでなく、窮地に追い込まれた悪党である。そのような立場にある者が他人に気を使うことも、決して容易ではない。追い詰められた悪党のカンダタは、他人への優しさを期待しにくい条件を二つとも満たしているのである。芥川のオシャカサマが優しさを期待したのは、そのように優しさを最も期待できない男であった。

人間の「身勝手さ」を主題とする作品に登場させるべき人物は、せめて並の人でなければならない。そして、もっと望ましいのは高い人格の人である。読者に訴えることができるのは、並の人間が見せるありきたりの「身勝手さ」よりも、立派な人が思わぬ時に見せる「身勝手さ」であろう。人間に抜き難い「身勝手さ」を取り上げるには、非の打ちどころのないと見なされる人物を登場させるのが一番よい。¹⁴⁴⁾

芥川の主題が「身勝手さ」であるにしても、究極の極悪人が究極の自己犠牲を行うことを前提にした上で、「どんな人間も克服し難い身勝手さ」

芥川龍之介が不用意に扱った素材

の例証しとして、極悪人を登場させるのははなはだ不穏当である。『蜘蛛の糸』で芥川が「身勝手さ」を扱っているとすれば、「見かけは善を重ねながら、必要とあれば躊躇せず悪を行う人物」が登場すべきであるのに、「悪を重ねながら、一度だけ悪を控えた人物」が登場していることになる。

芥川によると、クモの糸が切れたのは「自分ばかり地獄からぬけ出さうとする、韃陀多の無慈悲な心」のせいである。¹⁴⁵⁾ しかも、カンダタが置かれていた状況から考えて、これは並の「慈悲」ではない。聖人にも実践することが困難な究極の「慈悲」である。脅え切った究極の悪党に期待されているのは、何と究極の「慈悲」の実践である。そして、それが実践できなかったので、究極の惨めな「報」^{むくい}が課せられるのである。

芥川が構想した筋書きでは、脅え切った究極の悪党の「慈悲」を試すために、聖人さえ尻込みしそうな厳しいテストにかけられるのである。ところがケイラスの「クモの巣」では、「無慈悲」が原因でカンダタは地獄へ再落下するわけではないので、このような常軌を逸した不条理は想定されていない。ここでも『蜘蛛の糸』に見られる不可解な点は、芥川が素材の主旨を取り違えたために生じている。

あとがき

長尾が明らかにしたように、芥川はケイラスの主旨が理解できなかった。そこで『蜘蛛の糸』では、「間違った教え」を退けるという目標に代わって、「無慈悲」を退けるという目標が立てられた。一度だけクモを殺さなかったのを理由に地獄の苦しみが打ち切られたのも、極悪人に無条件の「慈悲」が期待されたのも、このように別の主旨が持ち込まれたからである。限りなく優しくなったオシャカサマが急変して無関心になるのも、同じ理由からである。

ブッダにしてもカンダタにしても、原資料の中で役割を与えられて、

「間違った教え」の排除を主眼とする物語展開の中に登場する。ここには「慈悲」をめぐる不条理などあるはずもない。しかしながら、『蜘蛛の糸』の作者がしたように、物語に別の主旨を持ち込めば不条理が生じるのは避けられない。ところが、素材の主旨が分からないという自覚は芥川になかった。むしろ素材の主旨を踏まえて話を進めていると思い込んでいるのであるから、自分の作品に不条理があるとは夢にも思いも寄らず、作品の不備に気づくことはなかった。

『蜘蛛の糸』の主題が人間に普遍的な「身勝手さ」であるなら、それを提示するのに作者は最も拙劣な方法をとっている。この点でも作者は話の筋を通すことに熱心でなく、物語の展開に注意深く気を配ることもない。そして、登場者の人物像を構想する際にはなほだ思慮に欠けている。素材をこれほど不用意に扱っているのであるから、注意深い人物とは言えず、素材とは別の主旨を持ち込んだために生じた破綻に気付かないのであるから、平衡感覚に優れた人物でもない。この作品を見る限り、芥川龍之介は「理知的な作家」でもなければ、豊かな想像力に恵まれた物語の語り手でもなく、深い教養を身につけた人物でもない。

注

- 1) ケイラスはザクセン王国に生まれ、チュービンゲン大学で古典文献学を専攻して学位を取り、ドレスデン陸軍士官学校の教官となって、ラテン語とドイツ語と歴史を担当した。在任中に執筆した著書 *Metaphysik in Wissenschaft, Ethik und Religion* (Dresden, 1881) の中で、ケイラスは『聖書』(die Bibel) を取り上げて、叙事詩『オデュッセイア』(Odysseia) に比すべき偉大な文学である言い、言葉通りに解すべきではないと主張した。こういうことを口にするのは当時でもどうということもなかったが、印刷して多くの人に配布したからには、学校側も事態を放置できなくなり、建前を持ち出して「ケイラスの考えはキリスト教精神に反し、士官教育にふさわしくない」と言わざるをえなくなった (Carus, *Ursache, Grund und Zweck*, Dresden, 1883,

Vorwort, p. iv)。

ここで謝罪すれば退職せずに済んだところを、ケイラスは敢えてそうはせず、自ら職を辞して国を離れ、将来の見通しがないままイギリスを経てアメリカへ行った（長尾、「芥川龍之介『蜘蛛の糸』原作の主題」, pp. 162-163; 長尾, 「仏の放光と蜘蛛の糸」, p. 22)。幸いアメリカで活動の場を得たケイラスは、40年間にわたって74点の本を書き、1500点の記事を発表したが、その扱う分野は極めて多岐にわたり、哲学と宗教に限らず、歴史や文学に詩、さらには政治にも数学にも及んだ。

- 2) 長尾佳代子, 「芥川龍之介『蜘蛛の糸』原作の主題 —ポール・ケイラスが『カルマ』で言おうとしたこと—」, 『仏教文学』27, 京都, 2003, pp. 161-172。

非常に馴染みにくい内容であったにもかかわらず、仏教文学会の編集委員の任にあった人々は、この論文を我慢強く精読し、時間をかけて討議して採用を決定した。その見識と勇氣は称賛に値する。

- 3) 長尾, 「創作仏教説話 *Karma* 誕生の背景」, 2005年4月4日に立命館大学で開かれた説話・伝承学会での口頭発表。この発表は後に『説話・伝承学』に投稿されたが、この学会の編集委員会は、原稿を読む前に不採用を即決した。判定の理由はついに明らかにされなかった。
- 4) 世界宗教会議はシカゴ万国博覧会 (World Columbian Exposition) の際に開かれ、1893年の9月11日から27日まで続き、延べ15万人が集まった (Henderson, *Catalyst for Controversy, Paul Carus of Open Court*, Carbondale, Ill., 1993, p. 64)。この宗教会議の運営委員会を代表したのは、シカゴ第一長老派教会のパロウズ (John Henry Barrows) であった。ケイラスは会議の準備に協力し、民族学部会と哲学部会の企画に加わっていた。そして、パロウズはケイラスを会議の助言委員に任命している。会議が始まると、ケイラスは9日目に “Science a Religious Revelation” をいう題で発表している (ibid., pp. 66-68)。この発表でケイラスは自説を主張し、「真理は科学によって追求が可能であり、科学に裏付けられない真理は、啓示として受け入れられるに値しない」と述べた。
- 5) 長尾, 「仏の放光と蜘蛛の糸 —ポール・ケイラスの原作の日本の絵師が重ねたイメージ—」, 『大阪体育大学紀要』37, 大阪熊取, 2006, pp. 17-32。

ケイラスの Spider-web については、中国語訳の仏教文献がかかわる可能性を考えて、山口静一は『増一阿含經』47に見られる「地獄に落ちたデーヴァダッタ」のエピソードに言及しているが（山口静一、『蜘蛛の糸』とその材源の関する覚書き、『成城文芸』32, 1963, p. 27）、長尾はそのような可能性を否定し、「[地獄から]救出されるなどという展開は、仏教の伝承と相容れない」と言う（長尾, op. cit., p. 21）。そして、長尾は釈宗演を取り上げ、シカゴの世界宗教会議を契機にケイラスがと親しくなったことに触れる（ibid., p. 23）。さらに、長谷川武次郎の縮刷本製作について調べたことを報告して（ibid., p. 28）、ケイラスの著書に引用された「日本の絵画」について説き（ibid., pp. 24-25）、日本版 *Karma* の挿絵を描いた鈴木華^か華^{せん}の絵画について論じる（ibid., pp. 29-30）。

6) ケイラスが活動の拠点としていたオープン・コート出版社（Open Court Publishing Co.）には、長年にわたって膨大な資料が蓄積されていた。ケイラス家の子孫が一括して南イリノイ大学に寄贈したらしい。手書き原稿とタイプ原稿のカーボンコピー、編集した雑誌のバックナンバー、出版した単行本、出した手紙のカーボンコピーと受け取った手紙の現物、絵画の実物と絵画の写真などである。

7) 長尾、「南イリノイ大学カーボンデイル校 特別文庫中の日本関連資料」、『大阪体育大学紀要』38, 大阪熊取, 2007, pp. 61-70。

一部を除いては目録がまだ作成されておらず、全貌がつかみにくいという（ibid., pp. 63-64）。膨大な資料はマイクロフィルム化されているが、図書館員の助けを借りて目当てのものを探し出すのは、容易なことではないらしい（loc. cit.）。長尾が探していたが日本になかった資料や、ふと見つけて強い興味を引かれた資料には、次のようなものがある。1) 1910年と1913年に出したケイラスの書簡4通（井上哲次郎に原稿の掲載を断っているのがある）、2) ケイラスに宛てた長谷川武次郎の書簡、3) ケイラスに宛てたマックス・ミュラーの書簡、4) *The Open Court* の初期バックナンバー、5) ドレスデン時代にケイラスが出した著作、6) ケイラスと大原嘉吉の書簡（ibid., pp. 64-65）。大原は *Gospel of Buddha* に感銘を受けて中国語に訳し、ケイラスとしばしば手紙を交わしている（Henderson, op. cit., pp. 112-113）。

8) 長尾が注目した資料の中に「ドレスデン時代にケイラスが出した著作」が

芥川龍之介が不用意に扱った素材

ある。ケイラスの背景を知る上で重要な資料であるが、残念ながら日本ではどこの図書館にもなく、長尾は大いに困っていた。この度は南イリノイ大学図書館の好意によって、*Ursache, Grund und Zweck* (Dresden, 1883) と *Aus dem Exil* (Dresden, 1885) との複写を提供してもらった。

- 9) 長尾, 『『蜘蛛の糸』原資料 *Karma* 出版の経緯 —オープン・コート社寄贈 南イリノイ大学モリス図書館所蔵資料について—, 2007年6月10日に花園大学で開かれた仏教文学会での口頭発表。

Spider-web に関連するものとしては、「増補の指示が書き込まれた *Karma* の原稿」について発表している。そして、その外に「ケイラス宛ての長谷川書簡 (*Karma* の印刷に関する連絡)」と「ケイラスが日本の商人に抱いた印象[を述べた文章]」について報告し、さらには「ケイラスの思想的背景を知ることのできる資料」を取り上げている。

- 10) 長尾, 「芥川龍之介『蜘蛛の糸』原作の主題」. p. 161 (始めに)。
- 11) P[aul] C[arus], “Karma, A Tale with a Moral,” *The Open Court* 36.8, 1894, pp. 4217-4221.
- 12) 1894年に *Karma* が雑誌 *The Open Court* に掲載されると、トルストイは直ちにロシア語訳を出した (Lev N. Tolstoj, “Karma,” *Severnijvestnik*, 1894.12, pp. 350-358)。
- 13) 1895年にはビューヒナーがドイツ語の翻訳を出した (Ludwig Büchner, “Buddhisten-Moral,” *Ethische Kultur*, Wochenschrift für sozial-ethische Reformen, Dritter Jahrgang, 22-23, Berlin, 1895, pp. 173-174, 179-180)。
- 「力と物質が結合して実在を形成する」と主張するビューヒナーは、精神活動を「刺激に反応して起こる脳細胞の運動」に帰した (*Kraft und Stoff*, 1854)。「俗流唯物論者」と呼ばれてマルクス (Karl Marx) に馬鹿にされたが、19世紀後半のヨーロッパで非常によく読まれていた。「俗流」とはいえ、唯物論者のビューヒナーがなぜケイラスの *Karma* に興味を興味を持ったのであろうか。意外なことに、ビューヒナーの訳文は余計な文言が一切なく、実に律義な印象を与える。
- 14) *Karma* や *The Gospel of Buddha* などのケイラスの著書は、100年以上も経った今でも元の出版社から発行されていて、今でも多く国で読まれ続けている。長尾が試しに *The Gospel of Buddha* を注文してみたところ、たちど

ころに本が届き、1997年に印刷された18刷の裏表紙によると、この本は今までに300万部以上売れたという（長尾、「芥川龍之介『蜘蛛の糸』原作の主題」, p. 162）。

- 15) 長尾, op. cit., p. 162 (ケイラスの時代)。Karma を書いた頃のケイラスは、雑誌 *The Open Court* の編集責任者であり、同時に執筆活動を行っていた。

週刊雑誌 *The Open Court* は、「科学に基づいて宗教と哲学を確立すること」を重要な課題として、イリノイでヘゲラー (Edward C. Hegeler) が創刊した。宗教と哲学の分野で新しい展開を試みようとしていたケイラスは、1887年に *The Open Court* の編集者に就任し、1919年に死亡するまでその任にあった。

19世紀末から20世紀初頭にかけてアメリカとヨーロッパが抱えていた問題を次々に取り上げ、ケイラスの編集した雑誌 *The Open Court* は知識人から強い支持を受けた。寄稿者の中には各分野に強い影響力のある人物が数多くいた (John Dewey 教育学, Charles Sanders Peirce 哲学, Lester Frank Ward 社会学, Bertrand Russell 哲学, Jules Henri Poincaré 数学, Ernst Mach 物理学, Ernst Heinrich Haeckel 動物学, Alfred Binet 心理学, Hugo de Vries 植物学, Friedrich Max Müller 比較宗教学)。

- 16) Paul Carus, *Karma, A Tale of Early Buddhism*, second edition, illustrated and printed by T. Hasegawa for The Open Court Publishing Co., Chicago, 1896.

1973年にオープン・コート社は新しい企画を立てて *Karma* を出版した。ケイラスのもう一つの著書 (*Nirvana, A story of Buddhist Philosophy*, Chicago, 1896) との合冊本を出したのである (Carus, *Karma/Nirvana*, La Salle, Ill., 1973, pp. 27-33)。この合冊本はその後も何刷りかが出て、現在も確実に売れ続けている (注14)。ケイラスの著書は今もまだ世界中で読まれているのである。

- 17) 東京の長谷川商会は1893年のシカゴ万国博覧会に縮緬本を出展したが、それを見てケイラスは大いに興味を引かれ、自分の本の印刷と製本を店主の長谷川武次郎に依頼した (石沢小枝子, 『ちりめん本のすべて』, 東京, 2004, p. 176)。皺を寄せた柔らかい和紙を使い、多色刷の挿絵を付けて、小型本

が1885年ごろから始まった。これを「縮緬本」と言うが、欧文の物語を印刷したもので、主として輸出用と土産物用に製作された。

ケイラスの依頼に応じて *Karma* を製作を引き受けた長谷川は、鈴木華邨に挿絵を描かせ、1895年には作業を終えて製品をケイラスに送った。続いて1896年には第2版を出し、1897年には第3版を出した（長尾、「仏の放光と蜘蛛の糸」, pp. 28-29（長谷川商会のちりめん本 *Karma*）。

- 18) Carus, op. cit., p. 13: “…… But there is no cause for despair. The man who is converted and has rooted out the illusion of self, with all its lusts and sinful desires, will be a source of blessing to himself and others, ……”

修行者のパンタカは地獄行きが決まった極悪人を励まし、「正しい教え」に従って the illusion of self を根ごそぎにすることを説く。そうすれば救われる道が開けるというのである。話の前書きともいべき冒頭部分で、Spider-web の主題がすでに出ているのである。cf. A3b（「アトマンは存在する」という「間違った考え」を捨てよ）。

- 19) *ibid.*, pp. 13-20.

- 20) 長尾、『蜘蛛の糸』原作の主題, p. 165（形式）:〈「蜘蛛の網」の挿話はある修行者が盗賊の首領に語って聞かせるお話としてはじまっており、このような仏教説話の形式に忠実に従っている。〉

- 21) インドの物語文学では、話の進行過程で新たな事態が展開すると、それをきっかけに話題が他の出来事に移る。こうして、目下の出来事の中に別の出来事がはめ込まれた形をとる。「枠となる話」Aと「枠となる話」Bとの間に、「はめ込まれた話」が組み込まれているのである。ここでは瀕死の重傷を負った大泥棒に苦行者が話し掛ける話を「枠となる話」とし、その中にカンダタの話が「はめ込まれた話」として組み込まれている。

「枠となる話」A: 地の文（大盗賊と苦行者の対話）

「はめ込まれた話」: 引用文（カンダタの話）

「枠となる話」B: 地の文（大盗賊の発言）

- 22) 仏教で伝えられている説話では、「枠となる話」Aにブッダが登場し、過去の起こった出来事を「はめ込まれた話」として語る。ブッダだけが前世のことを記憶しているからである。そして「枠となる話」Bでは、「過去のだれそれは現在とだれそれである」とブッダが解説して、前世の話に登場する

人々が現在の話の登場する人々と同定される。

Spider-web の「杵となる話」に登場する修行者のパンタカは、ブッダでないので前世のことを知らない。ここで「はめ込まれた話」として語られるのはパンタカが以前にどこかで聞いた話である。したがって、ブッダが前世のことを語り解説することがないという意味では、ジャータカ (jātaka) のように典型的な仏教説話ではない。しかししながら、Spider-web は「杵物語」の定式をきちんと踏んだインド風の話であり、話の構成は仏教説話の伝承を受けている。登場人物の配置はジャータカと違うものの、この話は仏教説話の形式を継承している。

- 23) Carus, op. cit., pp. 9-13 ('Among the Robbers'): [要約] 修行者のパンタカは山中で盗賊の群れに襲われてひどい目に遭うが、何とか命だけは取り留めた。そして、明るく日には盗賊たちが仲間割れして殺し合った。首領のマハードゥータに手下どもが刃向かったのである。さんざん打ち負かされた首領は、致命傷を受けたまま放置された。前の日にひどい目に遭わされたのに、パンタカは直ちに駆けつけて、一生懸命にマハードゥータを介抱した。
- 24) 長尾, 「芥川龍之介『蜘蛛の糸』原作の主題」, p. 167 (師であるブッダへの信頼)。cf. <loc. cit.: 本来, 地獄に落ちた衆生は地獄の苦しみによってその悪いカルマ(業)を焼き尽くすまで、地獄を抜け出すことができない。そんな彼らにとって奇跡とも言えるチャンス巡って来るのが、地上にブッダが出現した時である。……>
- 25) Carus, op. cit., p. 18: You yourself must make an effort. The Buddhas are only preachers.

Carus, *The Gospel of Buddha*, Chicago, 1894, p. 111: You yourself must make an effort. The Tathāgatas are only preachers. The thoughtful who enter the way are freed from the bondage of Māra.

- 26) ブッダになろうと決心してから実際にブッダになるまでの時間、すなわちブッダになるまでに要する時間は仏教の伝承でよく知られている。それによると、ブッダになるまでに経過する時間は3アサンキャ・カルパ (asamkhyā kalpa) と言われる。

Abhidharmakośabhāṣya, ed. P. Pradhan, Patna, 1975, p. 181 (*kośa* 3.93d-94a^a): tad asaṁkhyatrayodvavam buddhatvam | (ブッダである

芥川龍之介が不用意に扱った素材

ことは、3 アサンキヤ〔・カルパにわたる準備〕の結果である)。

ここに見える「カルパ」(kalpa) という語は、超天文学的な時間単位を指していて、「一つの宇宙が発生して消滅するまでの時間」が1カルパである。そして、「アサンキヤ」(asamkhyā) という語は、極大の数を指す数詞であり、その数値については、仏教の伝承でよく知られている。

ibid., pp. 181-182 (*bhāṣya* ad loc.): …… ekānām daśako dvitīyam | daśa daśakāni śataṃ tṛtīyam | daśa śatāni sahasram | daśa sahasrāni prabhedah | daśa prabhedā lakṣam | …… daśa balākṣā mahābalākṣam | daśa mahābalākṣāny asamkhyam | …… (…… 一つの10 [10^1] が二桁である。10の10, すなわち100 [10^2] が三桁である。10の100, すなわち 1000 [10^3] [が四桁である]。10の1000, すなわち10000 [10^4] [五桁である] …… 10のバラークーシャ, すなわちマハーバラークシャ [10^{50}] [が五十一桁である]。10のマハーバラクシャ, すなわちアサンキヤ [10^{51}] [が五十二桁である]。……)

そうすると、*kośa* 3.93d-3.94a^a の意味は「ブッダであることは、 3×10^{51} カルパにわたる準備の結果である」ということになる。ブッダになろうと決意してから、宇宙が発生から消滅に至る過程を途方もなく繰り返す間、ゼロが51付く回数 of 三倍も繰り返す間、せっせと準備を続けられれば、めでたく目的を達することができる。

27) 長尾, op. cit., p. 167 (師であるブッダへの信頼)。

28) Carus, *Karma*, pp. 13-14.

長尾, op. cit., p. 167: <彼は幾劫もの間、地獄に墮しており、その悲惨な境遇から抜け出すことができませんでした。しかし、その時、ブッダが地上に出現して至福の境地に到達しました。その記念すべき瞬間には、すべてのデーモンたちを鼓舞して命と希望を与える光線が地獄に差し込みました。> (劫 = kalpa)

29) ケイラスのテキストでは、それまで地獄にいた期間に言及して “He had been in hell several kalpas” と言われる。Spider-web を語るケイラスは、仏教の伝承に添って時間設定をしているのである。1カルパは 432×10^7 年であるから、一つの宇宙が発生してから消滅するまでの時間は、 432×10^7 万年すなわち4.32億年である。カンダタの身体が人間世界で死んで心が地獄へ

移動してから、several kalpasの時間が経過している。カンダタは10億年以上にもわたって地獄で苦しんでいるのである。地獄で味わう苦痛の激しさと滞在期間の長さは、それまでに行った「悪い行い」の質と量によって自動的に決まる。

30) 長尾, op. cit., pp. 167-168 (師であるブツダへの信頼)。

31) *ibid.*, p. 168。

cf. 長尾, loc. cit.: <このような仏教の教義の基本的な考え方がわかりやすくあらわれている例として、説一切有部の伝える經典に繰り返し現れる定型句(注34)をあげておく。>

32) *Avadhānaçataka*, ed. J. S. Speyer, 2 vols., Commissionnaires de l'Académie Impériale des Sciences, St.-Pétersbourg, 1906, 1909.

この説話集はサルヴァースティヴァーダ派(sarvāstivāda/説一切有部)の中で伝えられてきた。このことに言及して、長尾は「説一切有部の伝える經典に繰り返し現れる定型句」と言う(注31)。

33) *Avadhānaçataka cent légendes buddhiques*, traduites du sanskrit par M. Léon Feer, *Annales du Musée Guimet* 18, Paris, 1891.

34) *ibid.*, p. 10.

長尾, op. cit., p. 168: <ブツダ世尊たちが微笑をお浮かべになる時には、青黄赤白の光線が口から発し、下の方に行ったり上の方に行ったりします。下の方に行く[光線]は、等活・黒繩・集合・叫喚・大叫喚・炎熱・大炎熱・無間・アルブダ・ニラルブダ・アタタ・ハハヴァ・フフヴァ・青蓮華・紅蓮華・大紅蓮華という諸地獄に行き、熱い地獄では冷たくなって降り注ぎ、寒い地獄では温かくなって降り注ぎます。そのため、そこにいる衆生たちの特有な責め苦は和らげられるのです。彼らは「おいみんな、一体我々はここから死没したのか、それとも、他の所に転生したのだろうか」と思います。彼らに浄らかな信仰を生じさせるために、世尊は化身(けしん)を送ります。彼らは化身を見て思います。「おいみんな、我々はここから死没したのでもなければ、他の所に転生したのでもない。そうではなく、ここにかつて見たことのない衆生がいるが、このお方の威力によって、我々の責め苦は和らげられたのだ」と。彼らは化身に対して心を澄まして、その地獄で受けるべき業を減ぼし、神や人間に再生して、そこで真理の受け皿となります。>

- 35) 地獄で苦しんでいる者たちに「ひたむきな信仰」を起こさせるために、ブツダは「[超自然力によって作り出す作業（神變）を行って]作り出した者を放つ」と言われる (*Avadānaçataka*, ed. J. S. Speiyer, 1, pp. 4-7)。
- 36) Feer, *Avadānaçataka*, p. 10.
[pour y renaître] et devenir des vases de vérité = yatra [caturṅām] satyānām bhājanabhūtā bhavanti
- 37) 長尾, op. cit., pp. 162-163 (ケーラスの時代)。
デュルヌフ (Eugene Burnouf) はフランス東洋学会 (Société Asiatique) の書庫にあったサンスクリット写本に取り組んで研究を進めていたが、やがて長年の努力が実を結び、1842年には *saddharmapundāika* (法華經) の翻訳が完成した (*Le lotus de la bonne loi, traduit du sanscrit*)。さらに2年後の1844年に、*Introduction à l'histoire du bouddhisme indien* が公刊された。
こうして、19世紀前半のヨーロッパで、仏教文献の研究は堅固な基礎が打ち立てられた。そして、19世紀後半に成し遂げられた成果は特に著しく、優れた研究者が次々に現れて、極めて水準の高い成果が数多く出た。主要な文献は慎重に校訂されて正確に翻訳され、優れた論文や著書が世に出た。こうして19世紀末のヨーロッパには、仏教について知りたいと思えば、正確な情報が豊富に用意されていたのである。
- 38) Carus, op. cit., p. 14: [Buddha] sent down a spider on a cobweb and the spider said: 'Take hold of the web and climb up.' When the spider had disappeared, Kāṇḍakya made great efforts to climb up, and he succeeded.
- 39) 「悪い行い」が行われると、それに相当する「辛い報い」が自動的に決まり、いつかはそれを受けなければならない。「行い」にはいつか必ず「報い」が伴うというのは普通の鉄則であり、ブツダもこれに干渉できないから、ブツダに頼んでも無駄である。行った「悪い行い」に相当する程度の苦痛は、相当する期間だけ耐え忍ぶよりほかない。決められた苦痛は、すっかり味わってしまわなければならないのであって、途中で打ち切ることはできない。したがって、地獄で苦しんでいる者の苦しみを中断して助け出すことはできない。
- 40) 生きている身体が死ぬと、心は次の身体に移動する。身体はやがて死んで消滅するが、心はいつまでも消滅することなく、存続し続けるのである。ひ

どく「悪い行い」とすると、それに相応する「辛い報い」として、地獄での苦しみが決められることがある。死んだ身体を離脱し心が移動して、地獄にいる者の身体に入るのである。地獄にいる者が地上世界に移る場合も、同じように身体が死んで心が移動するのであって、心を宿した身体が生きのまま場所を変えるのではない。したがって、地獄で苦しんでいる者がそのままの姿で地上世界に移転することはできない。

長尾、「仏の放光と蜘蛛の糸」, p. 20 (「奇跡を起こして地獄の衆生を救う」話が避けられた理由): <「地獄にいる衆生」が蜘蛛の網をつかんで登るといふ設定自体はやはり異様であり、下から上への空間移動で苦しみの世界から離脱するというプロットは仏教経典ではあり得ない。>

- 41) Carus, op. cit., p. 16: “Let me take hold of a spiderweb,” said the dying robber chief, when the samana had finished his story, “and I will pull myself up out of the depth of hell.”

この失敗物語が語られるのは、瀕死の大盗賊マハードウタを励ますためである。地獄行きを覚悟して絶望する大盗賊は、苦行者のパンタカからカンダタの失敗話を聞いて、そのような失敗をすまい決心した。ブッダを信頼して「正しい教え」を守り抜くことの大事さが身に染みて分かったからである。

- 42) Carus, op. cit., p. 16.

- 43) 長尾、「芥川龍之介『蜘蛛の糸』原作の主題」, pp. 165-167 (無我説)。

ケイラスが“self”という語を充てた“ātman”について、インド文化の文脈に添って詳しく解説した上で、長尾は仏教の立場を明らかにしている。さらには、中国語訳で用いられる「我」についても説明が及んでいる。この「我」は“ātman”を訳するために使われているというのである。

- 44) 長尾, op. cit., pp. 162-163 (ケーラスの時代)。

ヨーロッパの宗教と哲学に新しい展開を図る過程で、ケイラスは仏教に強い興味を抱くようになり、正確で水準の高い知識を求めていたが、その頃のヨーロッパでは仏教文献研究の分野で大きな成果が上がっていた。ケイラスはこれを効果的に活用することができたのである。こうして仏教の基本知識を身につけたケイラスは、やがて自分でも仏教について論文や著書を執筆するようになった。さらには物語まで作って、この異文化をヨーロッパ文化圏の人々に伝えようとしたのである。

芥川龍之介が不用意に扱った素材

1894年にケイラスが *The Gospel of Buddha* を編纂した際に、ヨーロッパの言語に翻訳された40点以上もの仏教文献を使って、この本の各章ごとに文献名と引用箇所を挙げている (pp. 233-241)。この文献リストには、Oldenberg, Rhys Davids, Fausbøll, Neumann, Max Müller を始め、第一級の研究者の成果が網羅されている。50年前に出たビュルヌフの *Introduction* も使われていて、この大先駆者の偉業が偲ばれる。仏教のいろんな局面を示すために、これだけ確かな資料を駆使して、ケイラスはこの本を編纂したのである。そして19世紀末のヨーロッパには、このような作業が可能な状況があった。

45) 仏教の立場からすると、人間は五つのグループが仮に集まった構成物に過ぎず、アートマンのように独立して作動するものが存在する余地がない。したがって、仏教ではアートマンの存在が認められない。仏教の教えによれば、「アートマンは実在する」という「間違っただけ」が起るのは、生き延びるために奮闘する過程でのことであり、自分の独自性を求めようとする過程でのことである。このような過程で「私が、私が」という気持ちが生じ、さらには「私の物」という思いが生じる。「アートマンは実在する」という「間違っただけ」を克服するこそ、「究極の解放」を得るために欠かせない第一の条件である。

46) Carus, op. cit., p. 13.

この文が出てくるのは、絶望のうちに死を迎えた者を励ます言葉の中である。死を迎えた大盗賊は、悪を重ねてきた我が身を顧みて絶望に駆られるが、介護している修行者は救済の可能性が残されていることを説く。そして、このわずかな可能性を実現するのに欠かせない条件として挙げるのが「アートマンが実在する」という「間違っただけ」を根こそぎにすることである。

47) *ibid.*, p. 14.

地獄で苦しむカンダタにブッダが話しかけて、救われる可能性を説き、ここでも「アートマンが実在する」という「間違っただけ」を捨てることが欠かせない条件とされている。

48) *ibid.*, p. 16.

そして、カンダタが再び地獄に落ちた理由を説明する場面にあるのがこれであり、ここでも同じように「間違っただけ」を捨てなかったことが取り上

げられ、救済が成らなかった原因とされている。

- 49) 長尾, op. cit., pp. 165-167 (注43)。

cf. ibid., pp. 166-167: くはるかな昔からインドでは「人間が感覚でとらえている世界は普遍不滅ではなく、移ろいやすくあてにできないものである」と言われていた。しかし、仏教以外の他の思想では、「この移ろい現象世界の根底には変化しない存在、消滅しない存在がある」と考え[、それを根源的存在や神、あるいは元素だとみなし]た。しかし、仏教ではこのような実体、あるいは究極的存在と認め[なかつた。したがって、「アートマン」と呼ばれる究極の実在も認めない。仏教の立場に立つと、先ず身に付けなければならないのは、「アートマンは存在しない」という「正しい考え」である。]>

- 50) この本の表題の下に“According to old records/ told by Paul Carus” (1894年版) または“Compiled by Paul Carus” (1994年版) とあるように、その頃までにヨーロッパで出ていた仏教研究の成果を集大成しようとしたものである。フランス語とドイツ語と英語に訳されていた45点の仏教文献から抜粋した文を編纂したものである。全巻が項目別に100の章に分かれ、そのうち最初の3章と最後の3章だけがケイラス自身の文章から成る。

数多くの仏教文献から文章を選び出して一冊に纏めたものであり、年代の違いや学派の違いは無視されている。このため、オックスフォード大学の真面目な文献学者カーペンター (J. Estlin Carpenter) から厳しい批判を受けて、「歴史的な配慮がなされていない」と言われた (“Review of *The Gospel of Buddha* by P. Carus,” *New World* 4, 1895, pp. 157-158)。

- 51) Carus, *The Gospel of Buddha*, preface, pp. vi-vii.

長尾, op. cit., p. 165-166: くシャーキャムニ・ブツダの教説の基本的な考え方を誤解しないように、読者に self という語をシャーキャムニ・ブツダが使用してような意味に解するように警告したい。人の self とは、シャーキャムニ・ブツダが仏教経典の中でも[その概念を]認めているような意味であり得るし、そう理解されてきた「アートマン」という語の翻訳である。シャーキャムニ・ブツダは彼の時代に一般的に理解されていたような意味での self の存在は否定しているが、人の知力、その個人の重要性、一言で言えば、その魂は否定していない。しかし、彼はいくつかの学派が、はっきりしたものの、一種の本質的なもの、仮に魂とされる形而上学的な行為者として人の身

体的、精神的活動の奥やあるいは中に存在すると考えていた一種の霊体 (soul-monad) という意味での謎めいた自我の実体 (ego-entity) である「アートマン」は否定した。〉

- 52) 「アートマンは存在しないという主張」という仏教の基本命題に無関心であったことについて、長尾は今までの研究者を批判して次のように言う。〈そこに〔ケイラスの文章に〕書かれている内容と芥川の著作との比較は表層的なものにとどまっている。結論を先に言えば、原作「カルマ」においてケイラスが「エゴイズム」という言葉で表そうとした概念と芥川が想定した「エゴイズム」の間には懸隔がある。これは研究者がぜひ留意すべき問題である。〉 (長尾, op. cit., p. 161)

ケイラスが“ego”とか“self”とかいう語を使うのは、インド文化圏で“ātman”という語で表そうとする概念に当てはまるためである。そして、ケイラスの Spider-web の中で、これを否定すべきであると繰り返し強調されている。仏教の伝承を踏まえたアートマン否定と芥川の想定するエゴイズム否定との間に懸隔があるところではない。何の関係もないのである。

「研究者がぜひ留意すべき問題」があるとすれば、ケイラスが扱っているのが日本人にとって仏教という異文化であるということに尽きる。そして、この異文化の根幹を成すのは、「アートマンは存在しない」という日本人が聞いたこともない命題であり、これは思いやりの欠如とは縁遠く、近代日本でよく話題にされるエゴイズム否定とも無関係である。近代の日本人にとって「自我」は幻想ではなく、現実に人間の心に抜き難く潜むものである。

- 53) 長尾, op. cit., p. 170 (「蜘蛛の網」の主題)。

cf. loc. cit.: 〈…… 芥川の『蜘蛛の糸』と異なり、「悪人はしょせん救われないのか」「お釈迦様は無慈悲ではないか」というような疑問は出てくる余地がない。「正しい行いの道へ入っていくことの大切さ」がこの話の主題である。〉

- 54) A2b (*avadānaśataka* に「ブツダが光を放つ話」が伝えられる)。

ブツダが放った真理の光が地獄に届き、ブツダの使いが派遣されて地獄で苦しむ者たちに「ひたむきな信仰」を起こさせる。すると、地獄での苦しみが終わった後で、神々の世界または人間の世界に生まれ変わる可能性が生じる。もしそうなれば、「四つの真理」を身に付けることができるようになる。

「四つの真理」が身に付くと、正しいものの見方が確立して、もう迷うことがなくなる。こうして、ブツダになる見通しがつくわけである。

55) Carus, *Karma*, p. 16: 'Let go the cobweb. It is mine!'

56) カンダタが救出されなかった理由は、「誤った考え」をまだ捨てていなかったからである。cf. A3a (地獄脱出が図られても、再び「正しい教え」に話題が戻る)。

57) 注39, 注40。

cf. 長尾, 「仏の放光と蜘蛛の糸」, p. 20: <…… The Spider-web の挿話はケイラスのオリジナルであって、仏教經典に基づくものではない。なぜかを一言でいえば、仏教の教義において地獄で責め苦にあっている衆生がその場で救われることはないからである。>

「The Spider-web がケイラスのオリジナルである」と長尾が言うのは、カンダタが地獄を脱出する場面は仏教文献に根拠がないということであり、この話の隅から隅までをケイラスが考え出したということではない。ここで長尾は山口静一の誤解を正そうとしている(注5)。

山口は Spider-web の背後に仏典がある可能性を考えて、『増一阿含經』に見られる「地獄に墮ちた者を救出する話」を挙げている。しかしながら長尾の言うように、このような話は「仏教の伝承と相容れない」(ibid., p. 21)のであり、「行いには必ず報いがあること」(因果應報)と「心は次々と移動すること」(轉生)に馴染めない中国人が考え出したものである。

58) J. Bolte und G. Polívka, *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm* 3, Leipzig, 1918, p. 538.

他のヴァージョンと違って、ここでは母親を救出するために野菜を降ろすことがない。ペトロは自分で煉獄へ行つて、母親といっしょに上に上がろうとする。この点で特異な話であり、「聖ペトロの母親」を代表するヴァージョンとは言えないが、何しろ採集されたのが桁違いに古く(1815, 発表 *Die Zeitschrift für Volkskunde* 1817), あまりにも有名な童話集に収められているので、無視することができない。

59) ibid., pp. 538-542.

おびただしい数のヴァリエーションについて長い注記があり、びっちり組んで4ページにも及ぶ。あまり多いので、総数を数える気にさえならない。それ

に、1918年以降に調査され報告されたヴァリアントの数も多からう。

60) Fedor Dostoevskij, *Brat'ja Karamazovy*, Moskva, 1879/1880, 3.7.3.

〔要旨〕 意地悪な百姓婆さんが死ぬと、悪魔たちは捕まえて火が燃える湖に放り込んだ。婆さんが生きていた時に、一度だけ玉葱を乞食女にくれてやったことがある。このことを婆さんの守護天使は思い出した。そこで、婆さんを玉葱に捕まらせて引き上げようとしたところ、ほかの奴らも付いて行こうとした。すると意地悪婆さんはそいつらを蹴り始め、「玉葱は私のものだ」と叫んだ。その瞬間に玉葱は壊れ、みんなそろって燃える湖に再び落ちた。

ドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』(*Brat'ja Karamazovy*)で、あくどい女のグルーシェンカもアリョーシャにだけは素直であり、親密に話を交わす場面がある。子供の時に料理女のマトリョーナから聞いた話を思い出して、グルーシェンカはアリョーシャに熱心に語る。この話に出てくるのはペテロの母ではなく、ただの百姓婆さんに過ぎない(ペテロの母が登場しない「聖ペテロの母」)。

グルーシェンカがこの話を語るのは、自分自身のことをアリョーシャに理解させるためである。「私は意地悪女であって、善いことをしたにしても、一度だけ玉葱を呉れてやったことがある程度のことである」と言いたいのである。グルーシェンカにとって、「一度だけの善いこと」はこの話の不可欠な要素である。

61) Selma Lagerlöf, *Kristuslegender*, Uppsala, 1906, p. 185, Vår Herre och Sankte Per.

〔要旨〕 主キリストと共に、苦勞してペテロは天国へたどり着いた。ところが、ペテロは悲嘆に暮れている。二年前に死んだ母親が天国にいなかったからである。ペテロの母は金を溜めるのに熱心で、乞食に恵んでやることもなかった[ので、天国へ入る資格がなかったのである]。

これに同情した主は天使を呼んで、地獄からペテロの母を連れて来てやれと命じた。天使は暗黒の地獄の中にペテロの母を見つけて抱いて登ろうとした。その時、地獄にいた者たちがいっしょに助け出してもらおうとして、ペテロの母に縋り付いた。ところがペテロの母は、一人一人の手を掴んで振り放して、次々と再び地獄へ落とした。これを見て驚い

たペテロは、[他の者にも]憐れみをかけるように叫んだが、母親は言うことを聞かなかった。

抱えているのが軽くなるほど、天使の翼にかかる負担が重くなる。最後の一人が振り落とされて[ペテロの母だけになると、耐えられなくなった]天使は辛そうに手を放して落とした。嘆き悲しんでいるペテロに主は言った。「すべての人を天国に入れることはほど喜ばしいことはない。だから私は隣人を愛するようにと教えるのだ。」

自然主義がもてはやされる趨勢に抗して、ラーゲルレーヴは人間の善を表現しようとし、その一環としてキリスト教の伝承から題材を採ることがあった。『キリストの伝説』(*Kristuslegender*)には、キリストにかかわる11点の話が採られているが、その一つが「我らが主と聖ペテロ」(*Vår Herre och Sankte Per*)であり、そこで「聖ペテロの母」が語られている。この話がスウェーデンあるいは広く北欧に伝わる民間伝承であるのかどうか分からない。

この点についてフレンワイダー (Henry F. Fullenwider) は否定的であり、ラーゲルレーヴがスウェーデンの民間伝承を知っていたと想定するのは間違いであろうと示唆している (H. F. Fullenwider, “The Onion and the Spiderweb: Paul Carus’ *Karma* and Other Literary Variants of Grimms’ *Sankt Peters Mutter* (Bolte/Polivka, num. 221), *Fabula* 28, 1987, p. 321)。フレンワイダーによると、ラーゲルレーヴは1885年と1886年にイタリアに滞在して民間伝承に親しみ、“La porru de S. Petru” が採られた民間伝承集を知っていたに違いないという (loc. cit.)。

- 62) Baron Corvo, “Stories Toto Told Me,” IV About Beata Beatrice and the Mamma of San Pietro, *Yellow Book* 9, 1896, London, pp. 93-102.

コルヴォー男爵 (Baron Corvo) というのはロルフ (Frederick William Rolfe) の変名である。出奔してヴェネチアに隠れ住んでいた時に、地元の話を集めて物語集「トトが語った物語」(*Stories Toto Told Me*) を編纂した。その中に「聖ピエトロの母ちゃん」(*The Mamma of San Pietro*) が含まれている。

- 63) ロンドンの季刊雑誌 *The Yellow Book* の1896年4月号に、コルヴォーの説話集 “Stories Toto Told Me” が掲載されたが、その中に「聖ピエトロの母」が含まれている。そして、1901年に刊行されたコルヴォーの作品集 *His Own*

Image の中に、“Stories Toto Told Me” が再録されて、「聖ピエトロの母ちゃん」が初めてケイラスの目に留まったのである。

64) The Editor (Carus), “Sampietro’s Mother: In Comment on Karma,” *The Open Court* 19, 1905, p. 756: I have never seen the story in print, but knew only of it from hearsay.

65) ここで話題になっている「聖ピエトロの母ちゃん」からケイラスが着想を得たのではないのは確かである。コルヴォーの“Stories Toto Told Me” が初めて雑誌に掲載されたのは1896年であり、ケイラスが *Karma* はすでに1894年に出ていた。それに、コルヴォーの話で婆さんを引き上げるのに使われる野菜は、人参ではなく玉葱である。ところが、意地悪婆さんの話が話題にな際に、ケイラスがしきりに口にするのは、玉葱ではなく人参である（注69）。

ラーゲルレーヴの『キリストの伝説』が出たのはさらにもっと後であり、ケイラスの *Karma* よりも12年後の1906年のことである。したがって、言うまでもなく、ケイラスが「我らが主と聖ペテロ」から着想を得たのはありえない。それに、ラーゲルレーヴの話では玉葱も人参も使われていない。天使が地獄へ降りて行って助け出そうとしていて、グリムが採集した話と同じように、引っ張り上げるために野菜を地獄へ降ろすわけではないのである。ただし、天使が登場して救出に関与する点は、ロシア版（『カラマーゾフの兄弟』で語られる話とヴォルコンスキーが語る話）と同じである。

66) 「聖ピエトロの母ちゃん」についてケイラスが一文を寄せてから（注64）11年後の1916年に、ある読者から手紙が届き、『カラマーゾフの兄弟』の「玉葱」に注意を促した。ケイラスはまた直ちに *The Open Court* に一文を載せ（The Editor [P. Carus], “Dostoyevsky,” *The Open Court* 30, 1916, pp. 381-384）、「The Spider-web を書いた時は、この話のイタリア・ヴァージョンもロシア・ヴァージョンも知らなかった」と言う（*ibid.*, p. 382）。ケイラスが「イタリア・ヴァージョン」と言っているのは、カルヴォー男爵の「聖ピエトロの母ちゃん」のことであり、「ロシア・ヴァージョン」と言っているのは、ドストエフスキーの「玉葱」（グルーシェンカがアリョーシャに語る話）のことである（注60）。

それに、グルーシェンカの話で引き上げ用に使われるう野菜は、コルヴォーの「聖ピエトロの母ちゃん」と同じように、人参ではなく玉葱である。と

ころが、意地悪婆さんの話が話題にな際に、ケイラスがしきりに口にするのは、玉葱ではなく人参である（注67）。

67) The Editor (Carus), "Sampietro's Mother," p. 756.

"an ancient fairy tale about a carrot"

"a story which is practically the same except that for the carrot an onion top is substituted" (コルヴォーの「聖ピエトロの母ちゃん」に言及して)

68) "Speech of Prince Serge Wolkonsky," *The World's Parliament of Religions*, ed. J. H. Barrows, Chicago, 1893, p. 89: I will take the liberty of relating to you a popular legend of my country.

このヴォルコンスキーはロシア帝国の代表でもなければ、ロシア正教会の代表でもなく、個人の資格で世界宗教会議に参加した ("Assembling and Wellcome," *ibid.*, p. 89)。

69) ヴォルコンスキー版には、"carrot" という語が5回使われている（注71）。地獄にいる意地悪婆さんを引き上げるのに使われるのは人参であるし、「たった一度の善いこと」を行う際にも使われるのは人参である。この変わった野菜が出てくるのは、単にヴォルコンスキーの思い違いに過ぎないのか。あるいは本当にそういうヴァージョンがあるのか。いずれにしても、人参が出てくるという点で、ヴォルコンスキーが世界宗教会議で何げなく紹介した話は、Spider-web の研究にとって無視できない重要な資料となっている。

70) "Speech of Prince Serge Wolkonsky," pp. 89-90.

シカゴの世界宗教会議で、ヴォルコンスキーが挨拶の中で「[ペテロの母が登場しない]聖ペテロの母」に言及している（注71）。ヴォルコンスキーは民話に研究者でもないし、記憶を確認することもなしに、例え話として「[ペテロの母が登場しない]聖ペテロの母」の話をしたに過ぎない。なお、グルーシェンカが幼い頃に下女から聞いた話も、ヴォルコンスキーが覚えていた話と同じように「ロシアの民間伝説」であるが、投げ下ろすのはやはり玉葱である。

71) "Speech of Prince Serge Wolkonsky," pp. 89-90 (「意地悪婆さんの話」を紹介する部分のみ):

There was an old woman who for many centuries suffered tortures in the flames of hell, for she had been a great sinner during her earthly life. One

day she saw far away in the distance an angel taking his flight through the blue skies; and with the whole strength of her voice she called to him. The call must have been desperate, for the angel stopped in his flight, and coming down to her asked her what she wanted.

“When you reach the throne of God,” she said, “tell him that a miserable creature has suffered more than she can bear, and that she asks the Lord to be delivered from these tortures.”

The angel promised to do so and flew away. When he had transmitted the message God said: “Ask her whether she has done any good to anyone during her life.” The old woman strained her memory in search of a good action during her sinful past, and all at once: “I’ve got one,” she joyfully exclaimed, “one day I gave a carrot to a hungry beggar.”

The angel reported the answer. “Take a carrot,” said God to the angel, and stretch it out to her. Let her grasp it, and if the plant is strong enough to draw her out from hell she shall be saved.” This the angel did. The poor old woman clung to the carrot: The angel began to pull, and, lo! she began to rise! But when her body was half out of the flames she felt a weight at her feet. Another sinner was clinging to her. She kicked, but it did not help. The sinner would not let go his hold, and the angel, continuing to pull, was lifting them both. But, lo! another sinner clung to them, and then a third, and more and always more—a chain of miserable creatures hung at the old woman’s feet. The angel never ceased pulling. It did not seem to be any heavier than the small carrot could support, and they all were lifted in the air. But the old woman suddenly took fright. Too many people were availing themselves of her last chance of salvation, and kicking and pushing those who were clinging to her, she exclaimed: “Leave me alone; hands off; the carrot is mine.” No sooner had she pronounced this word “mine” than the tiny stem broke, and all they fell back to hell, and forever.

72) グルーシェンカの話 (注60) とヴォルコンスキー版の話だけに共通する点がある。a) 登場するのはペテロの母ではなく、百姓の婆さんである。b) 蹴

りながら「玉葱/人参は私のだ」と叫ぶ。c) 叫んだとたんに玉葱/人参が壊れる。グルーシェンカの話とヴォルコンスキー版が同じロシアの民間伝承に溯る可能性が示唆される。最大の相違点は、ヴォルコンスキー版の人参である。

73) Harold Henderson, *Catalyst for Controversy, Paul Carus of Open Court*, Carbondale, Ill., 1993, pp. 66-68.

74) 世界宗教会議の参加者の中で特にケイラスが親しくなったのは、セイロン代表のダルマパーラ (Dharmapala) と日本代表の釈宗演であった。闘争的なダルマパーラはいつも喋りまくっていて、何かにつけて目立ったが、英語をほとんど話せないか全く話せないかの釈宗演は、もの静かで控えめであった。ケイラスはこの二人と仲良くなり、以後も頻繁に手紙を交わしている (Henderson, op. cit., pp. 92-93, 109-112)。

ケイラスが釈宗演と親しくなったのは、「仏教の因果」について論じた発表を会議で聞いたのがきっかけであった。会議が終わった後、釈宗演はラ・サルのケイラス邸に招かれ、1週間もそこに滞在している (ibid., pp. 92-93)。そして、釈宗演の方もケイラスが気に入って、「よく知っている」とか「議論の立て方が正確である」とか言って、何と研究者としての資質を誉めている (長尾, op. cit., p. 163)。ケイラスも釈宗演も、相手を全く理解できずに仲良くなったのである。

75) 世界宗教会議の総会で読まれた挨拶は直ちにバロウズが編集して、その年のうちに事務局は印刷を終えて出版にこぎつけている (注68, 注71)。この印刷物は熱心な協力者のケイラスに届けられたはずである。*The Gospel of Buddha* (1894) の出版を控えて、ケイラスは多忙を極めていたであろうが、ヴォルコンスキーの話の一部を度忘れしても、印刷物を見て確かめることができたのである。

76) 「救出作業が失敗するだけで終わる話」でないのが Spider-web である。「正しい教え」を貫くこと、これが Spider-web の主題である。「救出作業が失敗する話」は主題を強調するためのエピソードとして使われているに過ぎない。この点を理解できずに、フレンワイダーはケイラスの Spider-web を「聖ペテロの母」のヴァリエントと決めつけた (Fullenwider, "The Onion and the Spiderweb," pp. 320-326)。

部分的な並行現象と表面的な類似に目を奪われて、「アートマンが実在する」という「間違った考え」に注意を払うことがなく、Spider-webの主旨を取り損ねたのである。フレンワイダーは *Karma* そのものをもっと細かく読むべきであったし、ケイラスの外の作品も読むべきであった。さらには、ケイラスの読んだと思われる仏教文献を検討すべきであった（小林信彦、『クモの巣』が『聖ペテロの母』のヴァリエントである可能性 —フレンワイダー説批判』、『桃山学院大学人間科学』30, 和泉, 2006, pp. 99-128）。

- 77) “Speech of Prince Serge Wolkonsky,” p. 90: kicking and pushing those who were clinging to her, she exclaimed: “Leave me alone; hands off; the carrot is mine.” No sooner had she pronounced this word “mine” than the tiny stem broke, and they all fell back to hell, and forever.

「これは私のだ」と叫んだとたんに縋っているものが壊れる。この点ではSpider-webと共通する。Carus, op. cit., p. 16: he shouted loudly: ‘Let go the cobweb. It is mine!’ At once the cobweb broke, and Kandata fell back into hell. 「クモの巣」のカンダタは「これは俺のだ」と言葉を出して叫ぶだけで、身体を動かして物理的力を発揮することはない。同じように「これは私のだ」と叫んでも、ロシアの婆さんの場合は意地悪行為の一環であり、インドの大盗賊の場合は「間違った考え」を吐露する言葉である。

ヴォルコンスキーの婆さんがある言葉を発すると、直ちに人參が壊れて婆さんは地獄へ再落下する。ケイラスのカンダタが同じ言葉を発すると、直ちにクモの巣が壊れてカンダタは地獄へ再落下する。この点は非常によく似ている。ところが、ヴォルコンスキーの婆さんは蹴ったり押したりしているが、ケイラスのカンダタはそういうことは一切しない。このような事実は、ヴォルコンスキー版へのケイラスの依存を示唆すると同時に、ヨーロッパの民話を仏教の文脈の中に取り込もうとしたケイラスの決意を示唆する。

- 78) 長尾, 「仏の放光と蜘蛛の糸」, p. 20 (「奇跡を起こして地獄の衆生を救う」話が避けられた理由): <これはシカゴ万博の時にヴォルコンスキーから聞いた地獄に落ちた意地悪婆さんの話が彼の潜在意識に残り, 創作活動において浮かんで出てきたのであろう。>

- 79) Baron Corvo, “Stories Toto Told Me,” p. 100: for a poor starving beggar woman had once prayed her, for the love of God, to give her some food, and

she had thrown her the top of an onion which she was peeling for her own supper.

コルヴォー版の意地悪婆さんは聖ピエトロの母ちゃんであるが、ロシアの百姓婆さんと同じように、腹を減らした乞食女に玉葱の葉を投げ与えたことがあり、「[一生で]たった一度の善いこと」をしている。

- 80) “Speech of Prince Serge Wolkonsky,” p. 89: “I’ve got one,” she joyfully exclaimed, “one day I gave a carrot to a hungry beggar.”

ドストエフスキーの伝えるグルーシェンカの話でも、ヴォルコンスキー版の話と同じように、登場するのは百姓婆さんであり、かつて乞食女に野菜をやったことがあり、「[一生で]たった一度の善いこと」をしている。ただし、ヴォルコンスキー版の話で野菜は人参であるが、グルーシェンカの話では玉葱である。

- 81) 長尾はケイラスの記述を取り上げて、〈[ブッダがカンダタに前世のことを質問するのは]ナンセンスだが、[カンダタが答えられないので、] 全体のつじつまはあっている〉と言う（長尾、「芥川龍之介『蜘蛛の糸』原作の主題、p. 164）。〈転生してなお前世の記憶を保持するのは特別な超能力を備えた者に限られて[いる]〉(loc. cit.) からである。

ブッダを目指す努力が最終段階に近づくと、いくつかの「超自然力」（神通）が備わるようになる。その一つが「前世の生活を思い出す知力」（宿命通）である。ケイラスのテキストに “Tathagata in his omniscience saw all the deeds done by the poor wretch” (Carus, op. cit., p. 14) とあるのは、このことに言及したものである。

ブッダまたはそれに近い水準に達していなければ、前世のことを思い出す「超自然力」は備わらない。最高水準に達していない者は、前世のことを何一つ覚えていない。それまでの記憶が出産の際にすっかり失われるからである。狭い隘を通過する際に、あまりの苦痛に耐え難いので、すべてを忘れてしまうのである。

- 82) カンダタに前世のことを質問したりして、ケイラスのブッダもうっかりすることがあるらしいが、答えがなかったので我に返ったのか、今度は仏教の伝承に忠実に「ブッダの全知でカンダタの行為をすべて見取った」と言われる。仏教の伝承では、あらゆる者の前世について覚えているのは、ブッダま

芥川龍之介が不用意に扱った素材

たはブツダに近い水準の者だけである。

83) Carus, *Karma*, p. 14.

Karma の縮緬本を長谷川商店に作らせる際に、この部分をケイラスが元のテキストに挿入した。長尾は南イリノイ大学のモリス図書館へ行って、ケイラスが古い原稿に挿入指示を手書きで書き入れたのを見つけた。このことについて、長尾は仏教文学会（2007年6月10日、花園大学）で発表している。cf. 注9, 『『蜘蛛の糸』原資料 *Karma* 出版の経緯』。

84) インド文化に根差す仏教では、身体を動かすことは心で判断することを抜きにして考えられていない。心のあるものだけが身体を動かすのであり、身体を動かすものは必ず心があることになる。したがって、自らの意志で身体を動かす動物だけに心があり、地面に固定して動かない植物には心がない。インドでは「行い」が三つの局面でとらえられる。体を用いる局面と声を用いる局面と心を用いる局面である。インド文化に根差す仏教でも、身体を動かす行為は声を出す意志表明を前提とし、声を出す意志表明は心でなされる思考を前提とする。

85) cf. A2a (ブツダが放つ光が地獄にも届く), A3c (「間違った教え」を捨てなかったので、希有の救出手続きが無効になる)

86) 長尾, 「芥川龍之介『蜘蛛の糸』原作の主題」, pp. 167-168 (師であるブツダへの信頼)。

cf. *ibid.*, p. 168: <…… 芥川の『蜘蛛の糸』では、そもそもブツダが教えを説かないし、カンダタは糸がなぜどこから垂らされた者かを知らない。>

87) 遅まきながら19世紀末になると、日本もヨーロッパから仏教研究を取り入れようとし始めたが、この方面の研究は遅々として進まなかった。インド世界と言語系統を同じくするヨーロッパ人と比べて、日本人は絶望的に不利な条件で文献を読まなければならなかったからである。それに、すでに膨大な量に達していた研究成果は、日本人には容易に近づけないヨーロッパの言語で書かれていた。20世紀になっても専門家が育っていなかったので、知識人が仏教について知ろうとしても、読むに値するものは日本語で出ていなかった。

1891年のヨーロッパにはすでに *avadānaśataka* の優れた翻訳が出ていたが、芥川の時代になっても、このような文献の所在すら日本では知られていなか

- った。ヨーロッパ並の教養を身につけることは、日本の知識人にとって望むべくもなかったのである。そして21世紀になった今も、事態は基本的に変わりが無い。長尾以前の日本人が Spider-web を読めなかった理由はここにあり、さらには芥川の『蜘蛛の糸』の不備を見抜けなかった理由もここにある。
- 88) 芥川龍之介、『蜘蛛の糸』、『芥川龍之介全集』2、東京、1977、p. 228。
- 89) 注24。
- cf. 長尾, op. cit., p. 167: <「ブッダは無条件の救済者ではない」と言うことも仏教の常識である。>
- 注25 (ブッダの職務は「正しい教え」を伝えることに尽き、後はそれぞれの人の問題である)。
- 90) 芥川, op. cit., p. 228。
- 91) *ibid.*, loc. cit.
- 92) *ibid.*, p. 228: 御釈迦様はその蜘蛛の糸をそつと御手に御取りになつて、玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まつすぐにそれを御下しなさいました。
- 93) 仏教では生まれ変わった際に前世の記憶は失われる。出産の苦しみのせいで、それまでの記憶がすっかり失われるからである。ブッダまたはそれに近い水準に者でない限り、人々は前世のことを何一つ覚えていないのである(注81)。
- これと違って、仏教の伝承を受けていない文化の中で育った芥川にとっては、生まれ変わっても記憶が失われず、地獄にいるカンダタもこの世にいたころのことを覚えている。一つ一つの出来事を記憶しているどころか、生前に習得した技術さえ覚えているのである。カンダタの登攀技術に言及して、芥川は「そう云ふ事には昔から、慣れ切つてゐるのでございます」と言っている(芥川, op. cit., p. 229)。
- この点で注目すべきは鈴木大拙の日本語訳である。ここで鈴木はケイラスのテキストにはない語句 (Carus, op. cit., p. 14) を勝手に補つて、「〔韃陀多は〕生來嘗て一小善事をも爲さずと思惟したればなり」と言っている(ケイラス著、鈴木訳、『因果の小車』、『鈴木大拙全集』26、2001、p. 14)。これでは、ケイラスのカンダタが前世のことを記憶していることになり、ケイラスのテキストに見られる文 “Tathagata in his omniscience saw all the

deeds done by the poor wretch” (Carus, loc. cit.) は意味をなさなくなる。

ここでブッダは “Did you ever perform an act of kindness?” とカンダタに質問している。カンダタが「前世のことを記憶する能力」を備えているはずはないから、長尾の言うように「この場合ブッダの質問はナンセンス」である (長尾, op. cit., p. 164)。しかしながら、ブッダはすぐ気を取り直して、テキストを慎重に検討した長尾が指摘するように、「天眼をもって彼の前世の善業を見る」(loc. cit.) のであるから、「全体としてのつじつまはあっている」(loc. cit.) のである。

カンダタが前世のことを覚えているかのようなことを語りかけたケイラスは、すぐ思い直してブッダが「超自然力」を発揮しない限り前世のことが明らかにならないと気づき、“Tathagata in his omniscience saw” という風に変えている。ここでケイラスが使っている his omniscience という語は、ブッダに備わった「前世のことを記憶する能力」を指している。ところが日本語訳を用意した鈴木は、ケイラスが言ってもいない言葉を挿入して、「生來嘗て一小善事をも爲さずと思惟したればなり」と言うのであるから、鈴木 of テキスト理解は長尾に遥か及ばない。ケイラスのテキストを直に読まなかった芥川は、読みの浅い鈴木 of 訳を鵜呑みにしているのである。

仏教の基礎知識が身につけていなかった鈴木は、「前世の記憶は失われる」という原則に無知であった。最初の著書 (*Outlines of Mahayana Buddhism*, Chicago, 1908) は、ケイラスのお陰で出版されたものの、その壮大な表題にかかわらず、仏教文献を読む訓練を受けていなかったため、内容はいい加減なものであった。文献に記載のないことを仏教と思い込んでいて、ド・ラ・ヴァレ・プサン (de la Vallée Poussin 1869-1937) から厳しい批判を受けた (Review, *The Journal of Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, London, 1908, pp. 885-894)。ヨーロッパの仏教学者の間で、鈴木の名前が上がることは二度となかった。

94) 芥川, op. cit., p. 231.

95) *ibid.*, p. 227: するとその地獄の底に、韃陀多と云ふ男が一人、外の罪人と一しよに蠢いてゐる姿が、御目に止まりました。

96) *ibid.*, pp. 227-28: この韃陀多と云ふ男は、人を殺したり家につけたり、いろいろ悪事を働いた大泥棒でございますが、

- 97) *ibid.*, p. 228: 或る時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。そこで健陀多は早速足を舉げて、踏み殺そうとしましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無暗にとると云ふ事は、いくら何でも可哀さうだ。」と。かう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやつたからでございます。
- 98) *loc. cit.*
- 99) *ibid.*, p. 229: どこまでものぼつて行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ございませぬ。いや、うまく行くと、極樂へはいる事さへも出来ませう。
- 100) *loc. cit.*: しかし地獄と極樂との間は、何萬里となくございますから、
- 101) 仏教の体系でブツダはもつぱら「正しい教え」を説き、「法則」に干渉することがない。cf. A2a (ブツダが放つ光が地獄にも届く)、注24、注25。
芥川は仏教には無関心であるが、だからといって日本の宗教文化に関心があるわけでもない。「極樂にいる御釈迦様」など。日本の文化伝承の中にない。日本で極樂に興味を抱いた人々は『阿彌陀經』を知っている。この文献に登場するのは「阿彌陀様」であつて、御釈迦様ではない (長尾, *op. cit.*, p. 164)。「極樂の御釈迦様」は、芥川の奇想天外な発明であつた。
助け出そうとしているカンダタが地獄に落ちて、芥川のオシャカサマは「ぢつと見ていらつしや[る]」だけである。こんなオシャカサマも日本の文化伝承の中にない。「ぢつと見ていらつしやるオシャカサマ」は、芥川が素材から移し損ねたものである。異文化としての仏教についても日本の宗教文化についても、芥川は何も知らなかつたし、知ろうともしなかつた。
ケイラスの展開する物語を理解できるだけの仏教の知識がなかつたし、何とか理解しようとする好奇心もなかつた。このようにケイラスの話が理解できず、日本の宗教伝承についても無教養であつた以上、Spider-web を日本文化の枠組みの中で話を組み替へることなど、芥川の手には負へることではなかつた。
- 102) 鈴木は *The Gospel of Buddha* を読んで大いに感銘を受け、これを日本語に翻訳した (『佛陀の福音』, 東京, 1895)。ケイラスの所へ行つて直接指導を受けたいと思ひ、釈宗演に推薦してもらつた (*Henderson, op. cit.*, p. 100)。

芥川龍之介が不用意に扱った素材

こうして、鈴木は1897年にイリノイ州のラサルへ行き、ケイラスのもとに身を寄せた。オープン・コート社の助手とケイラス家の使用人を兼ね、鈴木は何でも屋として働き、ケイラスは部屋と食事付で鈴木に週に3ドル支払った (ibid., pp. 102-103)。1908年に日本へ帰国するまで、こうして鈴木は長らくケイラスのもとで働いた。

- 103) 鈴木貞太郎 (訳), 『因果の小車』, 東京, 1898。

鈴木貞太郎は鈴木大拙の本名である。鈴木が *Karma* の訳『因果の小車』を出したのは、ケイラスのもとへ行った翌年のことである。この本は27ページの和装小冊子で値段は50銭であり、*Karma* の縮緬本を作った長谷川武次郎が発行している。

- 104) ケーラス (著), 鈴木 (訳), 『因果の小車』, 『鈴木大拙全集』26, 東京, 2001, pp. 14-15 (蜘蛛の糸): …… されど如来は知り給はざる所なし, この大賊の一生の行爲を見給ふに, 彼嘗て森の中を行けるとき地上に一つの蜘蛛の蠢々たるを見たりしも彼は, 「小虫何の害をもなさず之を踏み殺すも無残なり」と思惟したることありき (cf. Carus, op. cit., p. 14)

- 105) cf. A4b (「たった一つの善いこと」も「聖ペテロの母」に起源があるらしい)。

ブツダが放つ光は、地獄にいる連中すべてに平等に降り注ぐ。希望はすべての者に与えられるのであって、「せめて一つだけでも善いことをしたことがある」という条件は付いていない。「善い行い」をしようといてまいと、平等に機会が与えられるのである。

- 106) cf. A4b (「たった一つの善いこと」の「聖ペテロの母」に起源があるらしい)。

- 107) 長尾, op. cit., p. 167, 「無我説」: <…… いわゆる「わがまま」とか「自己中心」などという時の「我(われ)」とか「自己」とかいった日本語に翻訳すると誤解をまねきやすい。鈴木大拙もそのように考えたので, 「我執」という漢訳仏典用語を用いて訳した。つまり, 「self (ケーラス) = ātman (サンスクリット仏典) = 我[執] (漢訳仏典, 大拙訳)」というふうに対応する。>

- 108) ケーラス (著), 鈴木 (訳), op. cit., p. 15。

cf. Carus, op. cit., p. 16: 'Let go the cobweb. It is mine!' At once the

cobweb broke, and Kandata fell back into hell. The illusion of self was still upon Kandata. ……

- 109) 新村出 (編), 『広辞苑』, 第四版, 東京, 1955, p. 478. c.
- 110) cf. 注107 (長尾, op. cit., p. 167: 〈……とかいった日本語に翻訳すると誤解をまねきやすい。鈴木大拙もそのように考えたので, 「我執」という漢訳仏典用語を用いて訳した。〉)
- 111) 長尾, op. cit., p. 170 (「蜘蛛の網」の主題)。
- 112) cf. A3a (「アートマンは存在する」という「間違った教え」を捨てよ), 注46, 注47, 注48.
- 113) ケーラス (著), 鈴木 (訳), op. cit., pp. 13-14 (Carus, op. cit., p. 13)。
- 114) *ibid.*, p. 14 (*ibid.*, p. 14)。
- 115) *ibid.*, p. 15 (*ibid.*, p. 16)。
- 116) 芥川が素材として使ったケイラス作品の主題は, 長尾がいみじくも見抜いたように, 「正しい行いの道へ行つてころの大切さ」であり (長尾, op. cit., p. 170), 「正しい行いの道」は「アートマンは存在しない」という教えを前提とする。ケイラスの Spider-web はこの主題を追求するために組み立てられている。このような素材を基に別の主題で主部一貫した話を展開することは, 極めて困難であるというよりも, 論理的に不可能である。このことが分からなかった芥川は, 自分の理解の及ばないものを素材に使って「創作」を試みたのである。
- 117) 芥川, op. cit. p. 231: 自分ばかり地獄から抜け出そうとする, 韃陀多の無慈悲な心が, そうしてその心相当な罰をうけて, 元の地獄へ落ちてしまったのが, 御釋迦様の御目から見ると, 淺ましく思召されたのでございませう。
- 118) 片野達郎, 「芥川龍之介『蜘蛛の糸』出典考—新資料『因果の小車』の紹介—」, 『東北大学教養部紀要』7, 1968, p. 71。
- 119) 芥川が「アートマンにこだわる迷い心」を「無慈悲」に転換したのは, 日本語世界に起こった事象であり, 良いとか良くないとかということではない。しかしながら, 片野は事象ではなく, 事象を分析する研究者である。事象である作者の言葉を真に受けてはいけない。「[芥川の文章が]原作の主張を忠実に伝えたものと見ることができよう」などという判断を下す前に, 片野はケイラスの文章を検討すべきであった。片野は資料の検討という最も基礎的

芥川龍之介が不用意に扱った素材

な作業を怠り、芥川が「原作」の文意を正確に理解していると最初から決めかかっている。

120) Carus, op. cit., p. 13.

ibid., p. 14.

121) 長尾, op. cit., p. 167 (無我説): <……「他人に思いやりを持ちなさい」といった意味ではなく、持っている世界観の基本的な転換、悟りに至る道へ入る最初の一步を意味しているのである。>

「アトマンこそ唯一の実在であり、それ以外のものはすべて幻である」と信じる立場から「アトマンなど決して存在しない」という立場へ変わるのであるから、ここで問題になっているのは、文字通り「世界観の基本的な転換」である。

122) ibid., p. 170 (「蜘蛛の網」の主題): <……ブツダが法(ダルマ)を説き、カンダタがその正道の教えを疑念を持たずに信仰するということが地獄の苦しみを緩和する重要な要素であることが全体の文脈から明らかであるから、芥川のように糸をつかむところだけを取り出して独自の脚色を行うと論理的に破綻してしまう。>

123) cf. A2 (ブツダが放つ光が地獄にも届く)。

124) cf. A3a (「アトマンは存在する」という「間違った考え」を捨てよ)。

125) Carus, *Karma*, p. 13.

126) cf. A3c (「間違った教え」を捨てなかったので、希有の救出手続きが無効になる)。ブツダの出現というめったにない機会に恵まれると、この希有の救済手続に与かることができる。「正しい教え」を身につける限り、この希有の救済手続は有効である。他方では、「正しい教え」を完全に受け入れないと、この希有の救済手続は自動的に無効になる。同じように機会に恵まれても、それを生かすも生かさぬも本人次第である。

127) 芥川, op. cit., p. 229: 何気なく鍵陀多が頭を舉げて、血の池の空を眺めますと、そのひつそりとした闇の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるやうに、一すぢ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るではございませんか。

128) ibid., pp. 227-228.

129) ibid., p. 229.

- 130) *ibid.*, p. 231.
- 131) 堀米庸一, 「教科書問題の疑問」上, 『〔東京〕朝日新聞』夕刊, 7月2日, 東京, 1970, p. 7.
- 132) 芥川, *op. cit.*, p. 231.
- 133) *cf.* 注126 (A3c).
- 当人が「正しい教え」を完全に受け入れていないと, この希有の救済手続きは自動的に無効になる。このプロセスにブツダが関与する余地は全くない。
- 134) 芥川, *op. cit.*, p. 231.
- 135) *loc. cit.*
- 136) 長尾, *op. cit.*, p. 170.
- 137) 芥川, *op. cit.*, p. 230.
- 138) *cf.* A2 (Carus, *op. cit.*, pp. 13-24).
- 139) *cf.* A3b (「間違った教え」を捨てなかったので, 希有の救出手続きが無効になる)。
- 140) 芥川, *op. cit.*, p. 230: 韃陀多はこれを見ると, 驚いたのと恐ろしいのとで, 暫くは唯, 莫迦のように大きな口を開いた儘, 眼ばかり動かして居りました。
- 141) *ibid.*, p. 231: 悲しさうな御顔をなさりながら. 又ぶらぶら御歩きになり始めました。
- 142) *loc. cit.*: 無慈悲な心が……罰をうけて, 元の地獄へ落ちてしまつたのが, …… 浅ましく思召されたのでございませう。
- 143) 吉田精一, 『解釈と批評』, 東京, 1962, pp. 150.
- 144) この点では芥川のもう一つの作品『枯野抄』が興味深い。これは『蜘蛛の糸』の3カ月後に発表された。芭蕉の臨終に集まって来た弟子たちの話であるが, 師匠の死を悲しむよりも自分の立場を気にする者たちの思いが詳細に描かれている。身勝手な連中ではあるが極悪人と言うには程遠く, どちらかと言えば非の打ち所のない人々である。
- 145) *cf.* B4a (芥川のカンダタは, 「無慈悲」のせいで罰を科せられる)。

追加1: 全国学力テストの国語の問題(中学校三年生向けB)に, 芥川の『蜘蛛の糸』が採られている。『蜘蛛の糸』の全文を出した後で, 「この文章

芥川龍之介が不用意に扱った素材

の内容や表現について説明する場合、どのように説明したらよいですか。次の1から4のうち、最も適切なものを一つ選びなさい」と指示して、四つの選択肢を挙げている（『平成19年度 全国学力・学習状況調査 平成19年4月 文部科学省』）。

この問題の出題者は『蜘蛛の糸』が完全無欠な作品であると強く思い込んでいて、その「内容や表現について」説明の仕方に定説があると固く信じている。残念ながら、出題者の信念にかかわらず、この問題を使って国語の「読解力」を測定することはできない。

追加2：2007年6月10日に花園大学で開かれた仏教文学会で長尾が行った発表（注9）は、学会誌に投稿して採用された。長尾佳代子、「『蜘蛛の糸』原資料 *Karma* 出版の事情 —オープン・コート社寄贈 南イリノイ大学モリス図書館資料から—」、『仏教文学』32号、2008年3月発行予定。

追加3：長尾は依頼されて次の論文を寄稿した。Kayoko Nagao, “Paul Carus as Involved in the Modernization of Japan,” *Japanese Religions* (appearing in March of 2008), Christian Center for the Study of Japanese Religions.

〔執筆者からのお願い〕言葉足りずの所が多々あろうかと存じます。ここで展開した論議に疑問がある方は、下記の住所に宛てて御自由に手紙で質問して下さい。615-0925 京都市右京区梅津大縄場町 6-6-3-1108 小林信彦